# 女子新讀本

巻七

375.9
Hi19
資料室

42227
教科書文庫
4
810
42-1926
200030
1728

資料室
37519
Hi19

文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書　大正十五年十月二十一日

東京帝國大學助教授　文學士　久松潛一編

# 女子新讀本

東京　至文堂

廣島大學教
35908
中等教科書協會

# 女子新讀本　卷七

## 目次

一　我が國民の團結性……藤岡作太郎……一
二　草の光……吉田絃二郎……八
三　詩人の力（韻文）……千家元麿……一九
四　國分寺の廢墟に立つて……大類伸……二
五　七騎落（謠曲）（一）……二五
六　七騎落（謠曲）（二）……三二
七　石橋山（劇）（一）……菊池寛……三八
八　石橋山（劇）（二）……菊池寛……四三

九　石橋山（劇）（三）……菊池寛…四九
一〇　病兒……吉江喬松…五五
一一　蚊帳……阿部次郎…六四
一二　旅……鶴見祐輔…六八
一三　新星……吉村冬彦…七四
一四　雲中巨人……松本亦太郎…八四
一五　光堂……泉鏡花…九三
一六　塔影（韻文）……河井酔茗…一〇三
一七　三十二年前（一）……藤村作…一〇六
一八　三十二年前（二）……藤村作…一一三
一九　三十二年前（三）……藤村作…一二三





二〇　寂光院（一）……高須梅溪…一三一
二一　寂光院（二）……高須梅溪…一四一
二二　旅の旅の旅……正岡子規…一五一
二三　貧居八詠（韻文）……正岡子規…一六〇

目次終



廣島大學圖書之印

# 女子新讀本　卷七

文學士　久松潛一　編

## 一　我が國民の團結性

日本國民の最大の特色は團結力の強大なるに在り、全一體として相離れざるに在り。小にして家を成し、大にして國を成し、家族は團欒して一人の如く、國家は和諧して一家の如し。支那の東海を縫うて、しかも大陸と離れたる洋中、超然たる仙洞高く墻壁を築いて、外犯すべからず、内紊るべ

からざる强固なる國民は養成せられたり。而して、この國民は、かけまくもあやに畏き現つ御神を上に戴き奉る。機なき舟は行方を知らず、主腦なき團體は蜘蛛の子と散るべき烏合の衆なり。國民にはこれを導くべき理想の光なかるべからず、現つ御神は赫燿として千秋動ぐことなき大光明と申すも恐あり。一道の靈光脈々として古今に渉り、仰望せる國民は精髓をこゝに養ひ、理想をこれに求めて活動す。大君いましてその下に國民あり、連綿たる皇統こゝに三千載、泝つて神代史上、天岩屋戸の神話を思へば、動ぎなき教訓は儼として存す。

神代の昔、素戔嗚尊同胞の親に乘じて、君臣の別を辨へず、



暴威を振ひて天照大神を苦しめ奉る。大神これを厭ひ、天岩屋戸を閉ぢて籠ります。天に懸つて國土を照らす光明、影忽ち消えて、黑闇々の中、民衆何を便りに動くべき。隙を覗ひて禍つ神は五月蠅なす涌き出で、紛擾亂離、開けたる國家はまた混沌の世に歸らんとす。八百萬神天安河原に集ひて熟議し、心を一にし、力を合はせて、更に天日の照臨を祈る。憧憬の後に希望あり。山の如き岩戸は開けて、曈々たる旭日天地を別ち、是非を明らめ、民衆その光明に浴して、各自の分を盡くすを得たり。歷代の聖帝は卽ち不窮の後に天祖の神靈を體現したまふもの、天つ日嗣の御名は、國民が古今に通じて奎通發展の敎化を仰ぐところの目標とまし

ます。普天の下、率土の濱、王士・王臣にあらざるなし。常燈上に輝き、國民その下に共同一致して一定の理想あり。一定の理想を追うて進めば、人をして極端に奔り、邪路に陷るを得ざらしむ。草も木も我が大君のものなるに、何處か鬼の棲なるべきぞ。理想の光は空假の幻に終ることなく、現實は時々刻々に、これに向つて近づかんとすれば、國民は希望に充ち、現世を虚僞・罪惡の巷として厭ふことなく、樂觀的に人生を觀じ、世間的活動を以て人間の務とす。上に萬世不滅の皇統あり、金甌無缺の國體は、その國民をして無限際に無限力を發揮せしむべし。

日本の社會は一の大なる家族たり。君は專制の君にあ

*草も木も我が大君のものなるに何處か鬼の棲なるべき。此の歌紀友雄の作と傳ふ。



らず、民は不平の民にあらずして、國家は卽ち父子・夫妻・兄弟を廓大したるものなり。日本上古の風、所謂族制政治を以て成り、家族と國家と緊密なる關係あり、二者に大小の差別ありと雖も、そのもと一物なり。國史ありてこのかた、聖皇を仰ぐの制と、家族親しむの制とは合一して、日本の社會を構成したり。而して盡未來際、國民が我が大君を拜み仕へまつるが如く、家族の親睦も一代を限りてのことにあらず。一代を限れる家族は强固に結合したる家族と稱すべからず。我が家族は一系の氏姓永く過去・未來に涉りて動かず。國家に天祖あるが如く、一家にまた氏神あり。氏神は卽ちその家を開ける祖先を祀れるなり。代々の子孫皆この神

の血を分てることを自覺して、同血の眷親十人も百人も唯一人と凝結し、家長を中心として、その手足の如く働く。現在家族の世に在る、みな祖先の賜なることを知り、益〻一家の榮達を計るは、自己の爲なるに止らず、祖先の名を辱めざらんが爲、後世子孫の幸福の爲なりとす。かくして、個人の活動はその死と共に消滅せずして、五尺の血肉の外に意義あり。輯睦せる家族は集まりて社會を組織し、こゝに和氣靄靄たる國家を見る。

聖德太子の十七箇條憲法の第一條に、和を以て貴しとすといへり。一家の親は引いて一國の和となり、君民上下合體して、確立せる理想を追うて進む。されど、庭前の樹を見





るに曲折あり。四季の變遷その順を違へずと雖も、時に寒暖の期を失することなきにあらず。社會の秩序の紊るゝ時あり、民衆の歸趨の蔽はるゝ時ありて、國家は沈滯萎靡す。唯國民が全一體として最も强固に統合せられ、理想の燈最も明らかにその前に輝く時、個人は國家の利益の爲に一死を惜しまず、現在を未來の犧牲として憚らず、國運こゝに於てか振興す。上古、神功皇后が韓國を征服し給ひしが如き、その好例なり。鎌倉幕府の創立は、天皇と庶民との間の障壁を築きて、國民歸嚮するところを失ひ、天下漸く亂れ來りしが、豐太閤の出づるに及びて、禍亂を戡定し、日光再び天に高く、久しく抑壓に艱みたる希望は勃然と頭を擡げて、更に

韓國の征討となりぬ。國民が一體として活動する時、國運の最も發揚すること、以て見るべし。

此の如きは、我が國民に限れる特色にあらずして、世界を通ずる國家興廢の定則ならん。されど、世界のうち、一國興りて一國滅び、一朝絶えて一朝繼ぎ、千年の舊國老いてなほ盛んなるものなきに、ひとり我が國が上下三千載、抑揚・波瀾を經て益〻振ひ、更に青年の元氣を回復したるもの、これ比類なき我が國民の强固なる團結力に由るにあらずして何ぞや。

（藤岡作太郎*）

*號は東圃　文學博士　國文學者　明治四十三年歿。



## 二　草の光

いつまでも、私の心をして子供の心であらせたい。

若い草の葉は、やはらかに太陽の光を抱擁してゐる。

老いたる草の葉は、かたくなに太陽の光を反撥してゐる。

若い草の葉を見ると、私は若い草の柔順さを羨む。

子供を見ると、私はあの澄んだ黑い眼の前にほゝ笑みたくなる、尊くさへ思ふこともある。

老いたる草の葉を見ると私は自分の心の老い行くことを悲しむ、年々に自分の心のかたくなになつて行くことを悲しむ。

言葉は魂の響であると言つた詩人がある。

子供の聲は澄みきつてゐる、子供の魂は澄みきつてゐる。

のである。

年の寄るにつれて人間の聲はかすれてゆく。年寄るごとに人間の魂は傷つけられてゆくのであらう。

×

子供はいつもうたふ、ありつたけの聲をしぼつて。

今朝は大雪であつた。

私の家の隣の廣い草の原も、今日はすつかり深い雪につまれてしまつた。

通りかゝりの小學校の子供一人が、草原の雪を見て、「あゝ見事」とませた口の利き方をした。

第二の子供も、第三の子供も同じやうに、「あゝ見事」と叫んだ。

そして次の刹那には、子供たちはコーラスを作つて、「あゝ見事、見事」とうたひ出した、極めて單調な歌の節をつけて。

子供たちの姿が木立の蔭に隱れてしまつても、まだ「あゝ見事、見事」といふコーラスの聲は雪空に響いてゐた。

私は思つた。

人間は幾つくらゐから、歌はなくなるのだらう。

人間はなぜ、大人になると歌はなくなるのだらう。

人間が大きな聲でうたはなくなる頃から、虛僞だの、僞善だの、僞藝術だのが生まれて來るのではないだらうか。

世界中の大人が、申し合はせて、今日から子供と同じやう

に、雪を見ても、雨を見ても、大きな聲でうたふやうになつたら、私たちの世界がもつと明るく、もつと住み心地よく、もつと正直に、もつと親切になるのではないだらうか。

世界中の人が曾てはみんな可憐な卽興詩人であり、卽興唱歌手であつた。

歌もうたはないで、人と人とが、憎み合つたまゝ死んで行かねばならぬといふことは、たまらなく悲しいことである。

×

夜、町を歩いてゐて、ふと空を仰ぎ見て、久しいこと空を見なかつたことに氣付くことがある。「こんなに美しい星があるのに、なぜ夜の空を忘れてゐたらう」と思ふことがある。





そんな時は、自分の荒んでゆく心を呪はしく思ふこともあるが、あまり地上の悲しみが多いために、いつも俯向きがちに町を歩いてゐる自分の魂をあはれと思ふ。

空を仰ぐほどのゆとりをも持たなくなつた自分自身の生活をいたましく思ふ。

×

印度の傳說のうちに、神が人間を拜んでゐたといふことがあるさうだが、宗教家も人間を拜まなければならぬ。學者も人間を拜まねばならぬ。

宗教家が「俺は宗教家である」と考へた時、そこに非人間的なパリサイの徒が生まれる。

×

説教壇の上に立つてゐて、説教をすることを恥ぢる宗教家は尊敬したくなる。

キリストの像

立派な藝術を生みながら、なほ自分の藝術を恥ぢる藝術家は尊敬したくなる。

立派な藝術家でさへあるならば、たとへ一篇の詩をも作らないとしても、かれが、この世界にかつて生存したといふ事實だけで、人生に何等かのささげ物を齎





してゐるのではないかと思ふ。

キリストはたとへ説教をしなかつたとしても、或はたとへ一人の弟子をも持たなかつたとしても、一生ナザレとして平凡な生活を送つたとしても、かれが嘗てユダヤに生きてゐたといふ事實だけで、人生に光を與へることができたではなかつたらうかと思ふ。

×

もし、空に無數の星の群のなかに、ただ一つの黑い星があらはれたとしたら、どんなに夜の空の美が損はれるであらう。

もし、私達の生涯に、ただ一人の人が絶えず私たちに對し

て憎みのメスを研いでゐるとしたら、私たちの生涯はどんなに寂しいことであらう。

空には一つも黑い星はない。

けれども、人間の世界にはあまりに多くの黑い星がある。

キリストにすらユダがあつた。

人間は永劫に憎みから救はれることはできないものだらうか。

×

愛するものの前に跪いた刹那に、もし自分を憎む敵の眼を思ひ出さなければならぬとしたら、私たちの愛はほんとうに脆いものである。





たとへ千人の愛する者を持つたとしても、ただ一人憎む者を持つてゐる間は、私たちの愛は脅かされてゐる。

神の祭壇に獻物をする前に、その兄弟とやはらげと言つたキリストの言葉が、始めてこのごろ私の胸にはつきりと響いて來たやうな氣がする。

「お互に寛容であれ。お互に人の罪をゆるし合はうではないか。一人でも憎みのメスを懷に隱してゐる者がある間は、人間の世界は救はれない。」

人間みんなが、こんな心持ちから、一緒に抱き合つて踊るやうになる日が、いつかは來るにちがひないとも思ふ。

もし、そんな日が來ないのなら、人類はこの刹那に滅びて

しまつて惜しくはない。

キリストも、釋迦も、人類のために、人類全體の踊りの音頭を取らうとしたのであつた。

釋迦の像

まだ、しかし人類は踊ることを躊躇してゐる。なぜ私たちは踊らないのだらう。

誰でもいい、尙一度キリストや釋迦のやうに、眞つ先に立つて大きな聲で音頭をとつてくれれば。

それでも、或は臆病な人類はなか〳〵踊らないかも知れない。

けれども、音頭取りが後から後からと出て來て、飽きさへしなければきつといつかは人類全體が踊り出すにちがひない。

（吉田絃二郎*）

*名は源次郎　早稲田大學講師

## 三　詩人の力

無限に自分は生を渴望する。

自分は人生に興味を失ひたくない。

人生の諸現象に興味を失つた人間には、

至上の藝術も何も語らず、何も示すまい。

自然も彼等には冷く、

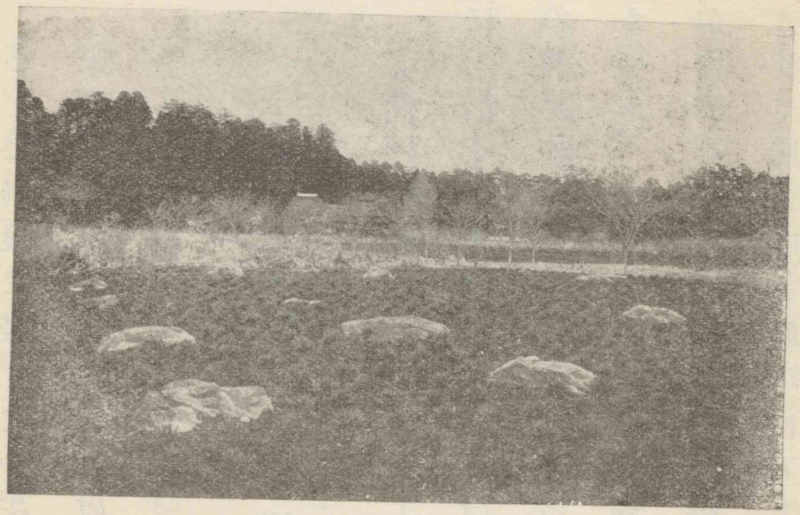
人も彼等には胸を閉ぢるだらう。
いかにその人の生涯は寂しく、狹苦しく、冷たく過ぎるだらう。
自分はさういふ人を多く見る、
希望も愛も要求も無く、
老衰して行く人を。
彼等の行く手には、只死と暗黑の深淵があるのみ。
あゝあはれな人々よ。
あゝ、これ等の此の世を捨てて去る人にも、
今一度足を停めさせて、
この人生をふりかへらせ、
ことに無限に盡きない生の豐かな惠を
味はせ、感じさせるのは、詩人の力ではなからうか。

（千家元麿）

詩人

## 四　國分寺の廢墟に立つて

現代は餘りに目まぐるしい、餘りに餘裕がない。都會裡に生活する我等に取つては殊にさうである。經濟の權威の前に跪いた現代の文化は、餘りに窮屈なものとなつてしまつた。猫額大の土地も利用し盡くされ、無住・無主の土地がないやうになつた現代から考へると、今私の眼前に展開されて居る廣袤數町に亙る地域に營まれた武藏國國分寺



國分寺金堂址

の大伽藍は、餘りに不經濟である。無用の土木を興したとの非難も起つて來よう。併し、それは大海を知らない井蛙の見である。千年の昔其處には大きな古典の世界があつた。縱令民主や平等の聲は聞かれなかつたとしても、或偉大な勢力の支配があつた。これを專制と罵り、一部階級の特權獨占と嘲る





者があらうとも、古典の世界は確に偉大であつた。如今經濟の觀念は民主・平等の思想と相提携して、偉大な世界を破壞してしまつた。餘裕のあつた大きな世界は、徹底的な併し窮屈な思想の爲に壓倒されてしまつた。誰がそれを惜しまないであらう。

私は決して現代を千年の昔に還さうとは思はない。併し、千年の後までも我等の前に遺された此の寺の瓦の破片、此の大きな礎石、乃至此の廣い遺址は、抑何を私共に語つて居るだらうか。思ふに、彼等は何れも千年以前の國分寺隆盛の當時を再現してくれとは叫んでゐないだらう。否、沒落と破壞と千年の歲月が齎した運命とを、當然の命數だと

甘んじて受けて居るだらう。只彼等は彼等を造つた千年前の人間――それは我等の祖先――を忘れてくれるなと我等に要求してゐるだらう。私はそれに相違ないと思ふ。彼等は土地と生活とに餘裕があつたと共に、思想にも餘裕に富んだ古典の人々が生み出した餘裕の偉大さを示した、其の文化を尊重せよと敎へて居るではあるまいか。惡平等と凡庸跋扈の時代に在つては、ニーチェ*でなくとも超人を思はずには居られない。現代生活に取つては、古典と餘裕とは缺くことの出來ない要素である。

私は、瓦の破片の散亂した、巨大な礎石の點々存在する、此の廣い國分寺の廢墟に立つて、うたゝ千年以前の人間に親

*獨逸の哲學者



しみを感ぜざるを得ないのである。

（大類伸*）

*文學博士
歴史學者
東北帝國大學敎授

## 五　七騎落（一）

（シテ　土肥實平　子方　土肥遠平
ツレ　賴朝　ワキ　和田義盛
同　從者五人　狂言　船頭）

一同「身は捨小舟、うらみてもかひなきや、憂き世なるらん。

賴朝詞「是は兵衞佐賴朝とは我が事なり。さても、昨日石橋山の合戰に身方うち負け、餘りに無勢に候程に、一先づ安房・上總の方へ開かばやと存じ候。いかに、土肥の次郎。（シテ詞「御前に候。賴朝「餘りに身方無勢にある間、一先づ安房・上總の方へ開かうずるにてあるぞ。急いで船のことを申し付け候

へ。シテ「畏まつて候。とくより御船の事を申し付けて候。急いで召されうずるにて候。賴朝「いかに、實平。シテ「御前に候。賴朝「只今船中に供したる人數は如何ほどあるぞ。シテ「さんぬ候。ただ七騎御座候。賴朝「さては賴朝までは八騎よな。きつと思出したることあり。祖父爲義奥州へ開きし時も主從八騎、父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎、思へば不吉の例なり。實平計らひて、船より一人おろし候へ。シテ「畏まつて候。實平仰せ承り、船のせがひに立上り、御供の人數を見渡せば、まづ一番には田代殿。地「さて二番には新開の次郎。シテ「又三番には土屋の三郎。地「四番は土佐坊。五番には、シテ「實平候。六番には、遠平「同じき遠平。シテ「艫板には、義實

能七騎落の圖（錦繪）

「義實あり。地「此の人々は君の爲、龍門原上の土に屍をば曝すとも、惜しかるまじき命かな。いづれを擇び出さんと、さしもの實平思ひかね、赤面したるばかりなり。賴朝詞「いかに、實平、何とて遲きぞ。急いでおろし候へ。シテ詞「畏まつて候。いかに、岡崎殿に申し候。急

いで御船より御おり候へ。義實「何と、某に御船よりおりよと候や。シテ「なかなかの事。義實「暫く、此の御供の内に、某一の老體にて候程に、かひがひしく御用にも立つまじきものと御覽じ限られてかやうに承り候な。其の儀に於ては、御船よりはおり候まじ。シテ「いや〳〵、さやうの儀にてはなく候。艫板に召されて候程に、陸の近さに申し候。義實「いや、所詮、此の船中に命二つ持ちたらんずるものを、御船よりおろされ候へ。シテ「これは不思議なることを承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで、命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂はれの候か。義實「さん候。某も昨日まで は命を二つ持ちて候を、早一つの命をば我が君に參らせ上



げて候。シテ「さて其の謂はれは候。義實「其のことにて候。昨日石橋山の合戰に、子にて候眞田の與一義忠は副將軍を賜はり、*俣野と組んで討たれぬ。されば親子は一體、二つの命ならずや。御分殘つて遠平をおろすか、遠平を殘して御分おるゝか、親子の内一人おりられ候へ。シテ「尤もにて候。餘りの道理に物なのたまひそ。いかに、遠平、君よりの御定にてあるぞ。急いで御船よりおり候へ。遠平「何と、御船よりおりよと仰せ候か。シテ「なか〳〵のこと。急いでおり候へ。遠平「幼く候へども、君の御大事に立たんこと誰にか劣り候べき。御船よりはおりまじく候。シテ「こざかしきことを申すものかな。君の御爲、父の命にてはなきか。急いで御船

*五郎景尙、大場景親の弟。

よりおり候へ。遠平「いや〳〵、君の御爲、父の命をば背くとも、御船よりはおりまじく候。シテ「言語道斷のことを申すものかな。君の御爲、父が命をば背くともおりまじきと申すか。其の儀ならば人手には掛けまじいぞ。義實「暫く。是は君の御門出なるに、誤りたるか、實平。シテ「何處までも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより、某御船よりおりようずるにて候。遠平「いかに、申し候。さらば、某御船よりおり候べし。シテ「何と、おりようずると申すか。實に〳〵今こそ某が子にて候へ。あれを見よ、敵大勢討ち出でたり。構へて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名殘こそ惜しけれ。かくて我が子をおろし置き、實平御船に參りけり。





地「ゆゝしく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子の別れ痛はしや。

遠平「父の別れは申すに及ばず、君を始め參らせて、皆人々に御名殘こそ惜しう候へ。地「彼の松浦佐用媛*が唐土船を慕ひわびて、渚にひれ伏しし有樣も、今遠平が親と子の別れにかはらじと皆涙をぞ流しける。遠平「契程なき早船を暫しとだにもいひあへず、後を見送りたゝずめば、地「はや遠ざかる浦の波、立別れ行く有樣を、遠平「餘の人々は心して、地「あはれみあへる、遠平「船の内に、實平「實平はひたすらに、弱氣を見えじとて、なか〳〵かへり見おきもせで、心强くも行く後に、敵大勢見えたり。すはや、遠平は討たるゝとて、賴朝も

*大伴狹手彦の妻

あはれみ、陸を見給へば、さすが實に、恩愛の契もただ今を限りぞと思ひ、實平は磯邊に向ひ、人知れず心のまゝならば、あはれ、遠平と一緒に討死せばやとあこがれて飛立つばかりに、思ひ子の別れぞ哀れなりける。

## 六　七騎落　(二)

ワキ一聲「弓張月の西の空、行くへ定めぬ船路かな。狂言「沖なる波の音までも、鬨の聲かと恐ろしや。ワキ詞「あれに見えたるが、御座船にてありげに候。急いで船を漕ぎ候へ。狂言「畏まつて候。

シテ詞「いかに、申し候。あれに兵船一艘見えて候。先づこなたより詞を掛けうずるにて候。義實「然るべう候。シテ「いかに、あれなる船は誰が召されたる御船にて候ぞ。ワキ「我もそなたの船影を怪しく思ひやすらふなり。そも誰人の船やらん。シテ「是は土肥の次郎實平が乘りたる船候よ。ワキ「何と、土肥殿の御船と候や。シテ「なか〳〵の事。さて其の御船は誰が召されたる御船にて候ぞ。ワキ「是こそ和田の小太郎義盛が乘りたる船候よ。シテ「さては和田殿の御船にて候か。ワキ「なか〳〵の事。内々申し通ぜし如く、御身方に參らん爲に是まで參りて候。さて君は其の御船に御座候か。シテ「和田は内々申し合はせたる事の候間、只今參りて候。さりながら、先づたばかつて心を見うずるにて候。いかに、和田

殿へ申し候。是までの御參りめでたう候。さりながら、面目もなき事の候。昨日の暮程より、我が君を見失ひ申し、かやうに浮かれ船となつて尋ね申し候よ。ワキ「何と、君は其の御船に御座なきと候や。シテ「さん候。ワキ「言語道斷の事にて候ものかな。我身方をば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝には離れ申し、此の上は命ありても何かせん。いで〳〵自害に及ばん」と腰の刀に手を掛くる。シテ「あゝ、暫く。君は此の船に御座候。ワキ「何と、君は其の御船に御座候とや。シテ「なかなかの事。ワキ「さて何とてかやうには承り候ぞ。シテ「是は戯れ事にて候。幸に陸近う候程に、其の船をも寄せられ候へ。御船をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうずるにて候。





ワキ「心得申し候。さらば、やがて陸へ參らうずるにて候。シテ「いかに、申し候。御前にて候。ワキ「我が君を見奉りて、今は安堵仕りて候。シテ「實に〳〵尤もにて候。ワキ「いかに、土肥殿に申し候。シテ「何事にて候ぞ。ワキ「此の御供の内に、何として御子息遠平は御座候はぬぞ。シテ「其の事にて候。さる謂はれあつて陸に殘し置きて候。ワキ「疾くよりかくと申したくは候ひつれども、以前某に心を盡くさせられ候其の返報に、今までは斯くとも申さぬなり。いで、土肥殿に引出物申さん」と隱し置きたる船底より遠平を引き立て見せければ、シテ「其の時實平あきれつゝ、地「夢か、現か、こは如何に」とて、覺えず抱き付き泣き居たり。譬へば仙家に入りし身の半日

の程に立ち歸り、七世の孫に逢ふ事の譬も今に知られたり。

シテ詞「いかに、義盛に申し候。さて此の者をば、何として召しつれられて候ぞ。ワキ詞「さん候。是まで伴なひ申したる謂はれを、御前にて申し上げうずるにて候。シテ「急いで御物語り候へ。ワキ「さても、昨日石橋山の合戰破れしかば、大場が*三郎景親手勢君を討ち奉らんと、大勢渚に討ち出でたりしに、某も一緒に討つて出でしが、汀を見れば、退きかねたる若武者一騎控へたり。某駒駈け寄せて、見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り、生捕る體にもてなし、船底に乘せ申し、是まで伴なひ參りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ。シテ「かゝる有り難き事こそ候はね。只今の御物語を聞き候ひて、落涙仕りて候を、さぞ人々の不覺の涙とや思召すらん。さりながら、地「うれし泣きの涙は、何かつゝまん、唐衣、日も夕暮になりぬれば月の盃とりどりに、シテ「主徒共に悅の、地「心うれしき酒宴かな。ワキ詞「いかに、實平、餘りにめでたき折なれば、一さし御舞ひ候へ。シテ「さらば、そと舞はうずるにて候。地「心うれしき酒宴かな。

地「かくて時日をめぐらさず、國々の兵馳せ參ずれば、程なく御勢二十萬騎になり給ひつゝ、掌に治め給へる此の君の御代のめでたき始めも、實平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ。

# 七　石橋山（一幕三場）（一）

**人物**

兵衛佐頼朝
田代冠者
大庭三郎
股野五郎
梶原平三
源太景季
その他軍兵大勢

**時**　治承四年八月

**所**　土肥の杉山





第一場

杉の大木が二三本生えてゐる谷間。大きい杉の木が一本地面に三十度位の角度で倒れてゐる。雨上りで木から雫が落ちてゐる。幕が開くと遠寄せの聲が聞える、矢聲が聞える、馬が嘶く、軍兵が二三人舞臺を走り過ぐる、又四五人駈け過ぎる。やがて大庭・梶原親子を始め騎馬武者が六七人駈け出て來る。皆馬から下りる。

武者一　どうもこの谷間より他に逃げ場所はないぞ。

武者二　さうだ、たしかにこの見當だ。

武者一　峰にも尾にも姿が見えぬとすると、この谷間より他にない。

武者三（遙かの軍兵に指圖する如く）オイ、そこの雜木の下を探して見ろ。

武者一　あゝ、此處の茅萱をひどく踏みつけてある、この谷が怪しい、確かにこの谷に違ひない。

大庭　（馬から下り、倒れてゐる杉の木の上へ上る　弓杖を突いてゐる）おゝ確かにこの谷間だ、確かに此方の方角へ逃げて來たんだ。オイそこの茅の中に籠手が片一方落ちてゐるぢやないか。

武者三　（籠手を拾ひ上げる）これですか、成程身方がこんな所へ籠手を棄てる筈がない。

梶原　木に登つてはゐないかな。

大庭　まさか、鎧を着て木には登れまい。若し登つてゐれば究竟の的だ。

軍兵ども尋ねあぐんで方々から歸つて來る。

武者一　どうだ、ゐないか。

軍兵一　見ません、狐の子を一匹捉へて來ました。

武者二　馬鹿め、俺達は源氏の大將軍を狩立ててゐるのだ。

大庭　ゐないかな。ゐない筈はないんだが、彼方にある小松の茂みを探したか。

軍兵二　彼處からは兎が三匹ばかり飛出しました。

大庭　馬鹿々々しい、茲まで追ひつめて來たものを、茲で佐殿を首にするかしないかで、俺達の恩賞の桁だつて違つて來るんだ。

軍兵又四五人空しく歸つて來る。

梶原　ゐないのか。

軍兵一　ゐません、彼處の山の窪みで雜兵一人討取りました。

梶原　首を見せい。

軍兵一　六十近いよぼ〳〵の爺ですから、討棄てて來ました。

大庭　どうもをかしい。此處にゐないといふ事はない、この谷間にゐないといふ事はない。もう一度みんな探して來い。（軍兵一寸躊

躇する）えゝ探して來いと言ふに……。

弓で乘つてゐる杉の木を打つ。

軍兵ども走り出す。

大庭　（首を傾けながら杉の木をもう一度弓で打つ）をかしいなア、この杉の木の音は。（もう一つ打つ）空洞だな、この木は。（大庭杉の木の根元を見る）おや、茲にこんな大きな穴が開いてゐる。（大庭微笑する）この木だな、隱れやがつたな。（大庭空洞の中へ弓を入れて搔廻す）どうも奥が深い、此處だ、此處だ、確かにこの中に隱れてゐる。それ探せ、おい、みんな入つて探せ。

梶原　私が探しませう。

大庭　大丈夫か。

梶原　大丈夫ですとも。



梶原弓を右手に持ち太刀に手をかけて中へ入る、と同時に暗轉。

## 八　石橋山（二）

第二場

第一場に於ける杉の大木の空洞の中、空洞の截斷面を見せる。空洞は右へ行く程高くなつてゐる。賴朝と田代冠者とが空洞の中にこごまり合つてゐる。

賴朝　（窮屈さうに體を動かしながら）おい田代、もつとお前の右の足をどうにか出來ないか。

田代　もうこれよりどうにもなりません、出來るだけ此方へ寄せてゐるんです。

賴朝　おい、土肥や岡崎はうまく隱れたらうか。

田代　大丈夫でせう、土肥は所の案内をよく知つてゐるから、大丈夫

逃げおほせたでせう。

賴朝　だつて、向うにも大庭だとか曾我だとか生え抜きの相模つ子がゐるんだから。

田代　いや大丈夫です。土肥はうまく逃げるに違ひありません。此處から十國峠へ出て箱根の方へ逃げたでせう。

賴朝　さうか、それだとよいが。

田代　それよりか貴方と私とはどうなるでせう。

賴朝　運だよ、未だ勝負は極つてゐないよ。未だ丁が出たか半が出たか、はつきり判らないんだ、未だ負けたとは極つてゐないんだ。俺は負けるまでは安心してゐるよ。

田代　さすがは源家の大將軍ですね。それで私も幾らか落着きました。





賴朝　お前が最後の防ぎ矢を射た時の樣子はどうだつた。

田代　大庭や股野の軍勢は、兎狩か何かするやうに山中を取りまいてゐました。

賴朝　さうか、いよ〳〵駄目かな。だが、まだわからない。俺は敵がこの中へ入つて來れば、一人だけは刺殺して自害をするつもりだが、自分で乞首（あひくち）が俺の脇腹へ突刺さるまではまだ思ひ切れない。

田代　私が御最期を見るまでは一人だつてこの空洞の中へ入れはしません。

賴朝　さう御最期などと俺が死ぬのを極まつたやうに言ふなよ、縁起でもない。

その時、空洞の上より一羽の鳩飛出して來る。

田代　あゝ鳩がゐますよ。

頼朝　捕へて置け、腹が空いたら食つてやらう。

田代　でもかはいさうぢやありませんか。この鳩も隱れてゐた所を捕つた所は、何だか私達の境遇に似てゐませんか。

頼朝　馬鹿を言ふな、鳩は鳩、頼朝は頼朝だよ。

田代鳩を捕へる。

急に空洞の上へ駈け上る人の足音がする。頼朝もどきつとする。

頼朝　たうとうやつて來やがつたな。

田代　來ましたな。

頼朝　まア默つてゐろ、まだ判らない。

外でがや〳〵と言ふ聲が聞える。二人は思はず身を縮めて緊張してゐる。

急に杉の木を叩く音がする、續いてもう一度聞える。間もなく空洞





の下の方から弓の先が出て動き廻る。

田代　私は駈け出して斬死しませう。

頼朝　待て〳〵、あれは弓の先だ、まだ運は盡きてゐない。

弓が消える。やがて兜の端が見えて來る。

頼朝匕首を拔きだん〳〵空洞の口の方へ近寄り、匕首を擬して待つてゐる。梶原首を出しのんきに見上る。頼朝匕首で梶原の内兜を突き刺さうとする。

梶原　（小聲で）まア待つて下さい。

頼朝　待てとは卑怯だな。

梶原　いゝえ卑怯ぢやありません、そんな亂暴な事をしなくつても話はわかります。

頼朝　なに、話がわかる、どういふ風にわかるんだ。

梶原　あなたを助ければ文句はないんでせう。

賴朝　それはさうだ。

梶原　ぢや助けませう、その代りあなたが戰に勝つたらお禮はしてくれるでせう。

賴朝　それは無論だよ、俺が天下を取れば、日本半國をやるよ。だが、俺が誰か他の人間に討たれて死んだ時はそれまでだよ。

梶原　いゝえそれはいけません、貴下が死んだら草葉の蔭ででも私の弓矢の冥加を守つて下さい。

賴朝　慾の深い奴だね、君は。俺が死んだ時にまで損をしないつもりだね。

梶原　いや、その位の利益がなければこんな大冒險は出來ません。靜かにしてゐて下さい、私はこれから外へ出て嘘を吐くんだから、貴下方が此處で騒いで打壞しては困りますよ。





賴朝　大丈夫だよ。

梶原去らうとする。

賴朝　この鳩をやるよ。

梶原　そんな物は要りません。

賴朝　いや、これを持つて行つて、人間のゐない證據にしてくれ。

梶原　成程考へましたね、あゝ、私にも工夫がつきました。

梶原その側にある蜘蛛の巣を取つて、兜や鎧になすりつける。

梶原　ぢや、何れその内。

賴朝　よろしく賴んだ。

暗轉

## 九　石橋山（三）

第三場

第一場と同じ。

倒れた杉の大木の上に、大庭前のやうに弓杖を突いて待つてゐる。

梶原空洞の口から這ひ出して來る。

大庭　どうだ、ゐたか。

梶原　いゝや居ませんよ。　あゝ骨を折らせやがつた、本當にむだ骨だ。　鎧を着てこんな中へ這込んで遣りきれない。　あゝ苦しい。

大庭　なーに、ゐない事はあるまい、探し方が足りないんだらう。

梶原　どうして、空洞の中を二三度這ひ廻りましたよ。　蟻も蝼も居ませんよ。　蝙蝠は澤山ゐますよ。　あゝ、彼處の峯の上を傳つてゐる侍の一行は佐殿ぢやありませんか、さうださうだ、さうに違ひない。　みんなあれを追つかけて見ろ。

軍兵に沙汰をする。

大庭　いやあれぢやない、あれぢやない、あれは曾我の連中だよ。　いや、この空洞が怪しい、この空洞に違ひない、誰か斧か鉞か持つて來い。

武者一　そんなものが手近にあるもんですか。

大庭　ぢや、私が自身で入つて見る。

梶原　大庭殿、そんなことをしてくれちや困りますね。　貴下はこの中に佐殿がゐるといふんですね。　よく考へてごらんなさい、今は平家の御代ですよ、そして佐殿は戰に負けたんでせう、誰だつて佐殿の首を取つて平家の見參に入れ、恩賞の二三箇國も貰ひたいぢやありませんか。　この空洞に佐殿がゐれば、見逃す奴があるもんですか。　それに捜し方が不審だといつて、もう一度捜さうといふのは私を疑つてゐるんですか。　若し人が先へこの空洞に入つてゐるとしたら、後から入つた兜はこんなに蜘蛛の巣がかゝります

か。御覽なさい、こんな山鳩がゐたぢやありませんか。これまでいつても未だ私のいふ事を信じないで、捜さうといふ人は、捜して御覽なさい。私にも覺悟がありますよ。

大庭　さうかなア、どうも私にはゐるやうに思はれるんだがな。大庭空洞の入口へ歩み寄り、弓を取直して中を搔廻す。

梶原　ゐないといつたらゐませんよ。それよりもこの鳩を差上げませう。晝飯の菜に炙つておあがんなさい。

大庭　馬鹿々々しい、そんな物は欲しくない。俺は佐殿の首を平家の見參に入れて、二三箇國も欲しいんだ。

梶原　貴下は何時も慾張つてゐるですね。ぢやこの鳩は放してやりませう。

大庭　何だ馬鹿々々しい、この鳩のやうに兵衞佐も逃げたんだな。



梶原　さうですよ、今頃は眞鶴あたりから船に乘つたかも知れませんよ。

大庭　えゝいま〳〵しい、ぢや一駈け追駈けて見よう。大庭及び他の武者去る。梶原父子だけ殘る。

景季　お父さん、本當にゐないんですか。

梶原　ゐるよ。

景季　ゐる。（血相を變へる）ゐるんなら、どうして見逭すんです。若しそんな事がわかつたら、平家からどんな咎めに合ふかもわからないでせう。討ちませう、討てば卽座に二三箇國の恩賞に有りつけるぢやありませんか。

梶原　馬鹿、何をいふのだ。

景季　何をいふぢやありません。賴朝がゐるのなら、容赦なく討取

りませう。お父さんがいやなら僕がやりませう。

梶原　だから、お前は出世が出來ないんだ。

景季　賴朝を討てば、大した出世ぢやありませんか。

梶原　いやこの中には賴朝なんかゐないよ。

景季　ぢや何がゐるんです。

梶原　（馬に乘りながら）この中には半目（はんめ）がゐるんだよ。

景季　半目とは何ですか。

梶原　無論賽ころの半目だよ。

景季　えゝ、何ですつて。

梶原　あゝ、俺が日本半國を賭けてある半目を、この杉の木の壺皿で隱してあるんだよ。

景季　お父さん、冗談を。



梶原　お前はお父さんに默つて尾いて來ればいいんだ、ハ、、、、。

（と笑ふ）

梶原悠然と退場

——幕——

（菊池寛）*

文學士　創作家*

# 一〇　病兒

ふと眼が覺めた。

豆ランプの光がぼんやり照らしてゐる隣室の中を、何物か小さい黑いものが、くる〳〵廻りながら歩いてゐる。

間の襖を明け放して、其の襖の陰に臺を据ゑ、其の上に載せて自分の顏へぢかに光の射さないやうにして置いたランプが、ゆら〳〵搖れて、次ぎの室全體が動いてゐるやうな

氣がする。頭をあげると、小さな物音がコソ〳〵コソ〳〵と耳にはいる。不安な思ひがしきりに起つて來て堪らない。

何だらう。

暫く物音がない。氣の故ではなかつたかと思はれてゐたのが、またコソ〳〵と響いて來る。鼠か知ら、でも先刻確かに何か小さな物が動いてゐるやうに思つたが、それも夢かしらとまた思つた。コソ〳〵と確かに聞える。臥椅子の間から机の方へ、机の前から書棚のある邊を、何物かが確かにコソ〳〵と歩いてゐる。

今度は其のものがぐる〳〵廻り出した。室の眞中を圓





を描いて廻つてゐる小さな黑いものがある。光は一層搖れて、室の中の物全體が一緒になつて廻り出しさうに思はれる。

私は思はず蚊張をはねのけて出て見たが、廻つてゐるものは少しも氣が付かない。同じくぐる〳〵廻つてゐる。見ると女の兒だ。三歳になる女の兒だ。母親が病氣で病院へ行つた後は、いつも私の側へ臥させて置いたのが、いつか拔け出して、私の書齋の中をぐる〳〵廻つてゐたのであつた。

不意に驚かしてはと思つて、名を呼びながら、だん〳〵傍へよつて行くが、一向見向きもしない。寢冷しないやうに

着せて置いた袷の寢衣の袖を無暗に振りながら、覺束ない足どりで、今にも倒れさうに廻つてゐる。私の居るのに氣が付かないらしい。名を呼んでも耳に入らないのか。私は徐々に傍へよつて、驚かさないやうに氣を付けて兩手で肩を抑へた。するとぴたりと廻るのを止めたかと思ふと、ぶる〳〵身を顫はせてゐる。急いで抱いて胸へ抱へると、身體が火のやうに熱い。額へ手を當てると、ぽつ〳〵と燃えるやうだ。

如何したのだらう。とにかく私は急いで蚊張の中へ入れて、頭を小さな枕へ載せてやると、不意に泣き出した、烈しい勢で泣き出した。じたばた身體をうごかして、手足もも





げて行きさうに動かす。身體中の力が熱となつて、無理にも小さな體驅の束縛を脱して逃げ出さうとしてゐるのだ。手の着けやうもない。抑へた手が燒けさうに思はれる。聲高く泣く毎に、口から熱い呼吸を吐く。この呼吸がつづく限り吐き出したならば、小さな身體に少しの溫みも無くなつてしまふだらう。

私はじたばたするのを、白い敷布の上に臥させて置いて、氷枕を拵へに勝手元へ走つて行つた。心覺えで闇の中を手さぐりで、小さな氷嚢へ水を入れて持つて來た。泣き聲はなかなか止みさうもない。泣く聲につれて熱は刻一刻高まつて來るやうな氣がする。小さな人體の形をした火

の塊團が白い布の上に轉がつてゐるやうだ。こんな小さな水枕では何の役にも立つまいと思つたが、そつと頭を兩手でもたげて、其の下へ入れた。夢中で私の其の兩手を搔き拂ふ。烈しい聲はかすれて咽喉もひつついてしまひさうに思はれる。

それでも水枕をさせて、額の上にまた濕れ手拭を載せてやると、頭の外部だけでも少しづつ冷えて來た。金盥に水を汲んで來て取換へ取換へ冷やしてやると、其の水が頭の中へしみこんで行くのか、手拭が熱を吸ひ取るのか、次第次第に泣聲が弱つて來て、唸るやうな咽ぶやうな鼾の聲と代つた。





私はまだ其の儘坐つて、濕れ手拭を取換へてゐた。今まで高い泣聲で、狹い蚊張の中の空氣が動搖してゐたやうなのが靜まつて、今では此の小さな身體を中心に、四方に發散する熱氣が空中に漲つてゐる。眠つてゐる中に、肌膚の細い目から、體溫が悉く放散して、目覺める元氣もなく、小さな魂は永遠に此の體軀の中に干からびて、殘留するのではあるまいか。

私はそつと搖り起して見ようかと思つて、手を付けてゐると、頭だけは少し冷えても、身體全體はまだぽか〳〵と熱い。身體までは冷して好いのやら惡いのやらわからない。私は不安な氣がして睡られず、朝まで其の儘に坐つて見詰

めて居た。

朝になつた。病兒はまだすや〳〵と睡つてゐるばかり、覺めさうにもしない。身體も次第に熱が冷めて來た。雨の音が聞えて戸の隙から障子が明るくなる。終夜ともした隣室の豆ランプの光が一層薄くなつて、時々戸外からの風に搖れてゐる。

私はランプを吹き消す元氣もなく、頭も重く、ぼんやり火光を見てゐた。火影がゆれるにつれて、病兒の呼吸もたゆたふ樣な氣がする。

何だか火光をめぐつて、不思議な、目には見えないが、何ものか其の邊を飛翔してゐるのではないかといふやうな氣がして來る。人目には觸れないが、その物が翼を振つて空氣を波立たせ、ひら〳〵舞つてゐるのではあるまいか。其のものの翼の波で火光が搖れたり、兒の呼吸がたゆたつたりするのではあるまいか。

私と病兒とを取り圍んでゐる蚊張が、此の時不意にゆらゆら波打つた。私は思はずぞつとして、小兒の上を見た。小兒の呼吸は別に變つても居ない。私はほつとしてまた頭を上げて火光を見た。そしていつまでも消えずに殘つてゐるもののやうな氣がして、私は火光を見詰めて居た。

（吉江喬松）

# 一一　蚊帳

（一）

蚊帳は艶なもの悲しいもの、親しみの深い、懷かしいものである。木綿の蚊帳はあの手觸りのへな〳〵な處から、あの安つぽい褪め易い青色まで、如何にも貧乏らしくて情ないが、麻の蚊帳の古い錦繪に見る樣な青色や、打ちたての生蕎麥の樣なシヤリシヤリした手觸りや、絽の蚊帳の輕い、滑かな、涼しい視覺、觸覺など、蚊帳其のものの感じが既に夏らしく爽かな氣分を誘つて來る。更に是を人事と聯關させて來ると、蚊帳の齎す情調は隨分複雜に豐富になる。





（二）

一つ蚊帳に寢ることは、一つ部屋に寢るといふよりも、遙かに對手との親しみを深くする。久しぶりで逢つた友達でも、廣い部屋に離れ〳〵に寢るよりは、小さい蚊帳の中に枕を並べて、寢苦しい一夜を明した方が、どの位思出の色が濃いことであらう。野と衢とは、人と人との住む處として餘りに惶しく、餘りに空漠である。人と人との魂の距離を縮める爲に、人の家はある。更に其の距離を近くせんが爲に、人の住む部屋はある。人の住む部屋の中に一區を劃して、人と人との魂の呼吸を最も親密に相通はしむる者は夏の夜の蚊帳である。

（三）

母親は添乳の手枕を離して、乳房を懷の中にかくしながら、すや〳〵と眠つてゐる子の上に、そつと幌蚊帳をかける。女性獨特の世界と女性獨特の幸福が、涙を誘ふ柔かさを以て男の想像の世界に迫つて來る。

（四）

自分は田舍で育つた。田舍では大抵の家に土藏があつて、蚊帳などは秋の初から翌る年の夏が來る迄土藏の隅に押し込められてゐる。下水の子子がそろ〳〵蚊になり出す頃に、祖母は屹度土藏に蚊帳を取出しに行つた。根附の樣に祖母のあとを追廻してゐた自分は、よく土藏の中に隨





いて行つたものであつた。藏の二階の薄暗い隅から、幽かに呻り乍ら飛び出す二三の晝蚊の羽音と、一年目に日の目を見る蚊帳の古臭い臭ひとは、自分の幼い頭にどんなに入梅の豫感を刻み込んだ事であらう。今でも入梅を思ふと、あの音とあの臭ひとが幽かに浮かんで來る。

（五）

秋になつて蚊帳を釣らなくなつた晩の廣さ、淋しさ、うそ寒さも亦忘れることが出來ない。北の國では蚊帳の釣手の獨り殘る頃には、もう機織虫が壁に來て鳴く。細めたランプの光を暗く浴びながら、蒲團の中に秋らしく小さくくるまつて、機織虫の歌をきいて寢た頃の心持は、未だにあり

ありと意識の奥に浮かんで來る。始めて蚊帳を釣らなくなつた晩に、沁々と物懐かしく秋になつたなと感じたあの心持――あの鮮かな、青く澄んだ、ふつくらした感覺をもう一度取返して、自然のあはれをつくづく味はふことが出來たら、それ以來積んで來た一切の經驗と知識とを代償とするに何の未練もない。

（阿部次郎）*

文學博士
東北大學教授*

## 一二　旅

自分の好きな夏が來た。

夏になると、いつも旅を思ひ出す。旅と夏とには、共通な心持が通つてゐる。著物が輕くなるだけでも夏は愉快である、そして世間が一どきに明るくなる。眼に見える自然のすべてが渾身の力をもつて立ちあがつてゆく。太陽が幾百日このかた、ためて來た總べての精力を地上に叩きつける。その天と地との凄じい戰のうちに、人間だけが恐れ入つて縮込んでゐられるわけがない。大抵の人が飽き飽きした自分の家から飛出して、大自然の懐のなかに躍り込んでゆく。これが旅である。

旅は解放である、自由を求める人間性の奔騰である。旅は冒險である、見知らぬ境涯を追究する古代獵人時代の本能の復活である。旅は進歩である、古き環境の包藏する廢頽氣分から脱出しようといふ人類の無意識なる自己保存

的努力である。そして旅は詩である、凡ての人が氣のつまる世間づきあひのうちに、大切に胸の底に秘めてゐるロマンティックな性情を氣まゝに發露するものである。そんな色々な心持が、我々を山と海と湖との邊に追ひやる、新しい見知らぬ都に追ひやる。そして日々に變る眼前の風物を送り迎へて、旅愁とか、客愁とか孤獨とか、色々な文字をならべながら、實はみな一樣に幸福である。

一生を漂泊の旅路にくらすジプシーの群が、強く我々の空想を刺戟する。小さい車の中に一切の財產を積んで、馬に牽かせて、歐洲の村から村を渡つてゆく。夜は森蔭に天幕を張り篝火をたいて、樂器に合せて唄聲をそろへる。雨





の夜は雨のまゝに月の夜は月のまゝに、をかしい生活であるに違ひない。それから中世紀に南歐羅巴の國々を旅してゐた漂泊詩人の生活が、自分たちの詩興を唆る。それは、どんなに自由な氣安い生涯であつたであらうか。もともと鑛物でない我々は、苔のむすまで一所にあぐらをかいてゐる義理はない。ましてや植物でもないお互が、偶然根の生えた地面にへばりついて寒い雪にうたれて綠の操を現はして見ても始まらない。同じ植物でも、椰子の實となつて、千里の波濤のうへを漂流してゆく方が、どの位氣がきいて居るかわからない。

旅することの好きな國民は英國人であらう。手鞄一つ

さげて、世界中を我が物顔に歩いてゐる。週末旅行と稱して、金曜日から翌週の木曜日までそこらをのたくりまはる。寒ければ諸威のスキー、暑ければアルプスの山登り、そして閑々に南亞弗利加の叔父さんを訪問する。

旅の眞の味はひは、新しいものを見て、知識を增すのではない、眼前に變りゆく風物を娯しむのではない、それは自分自身を味はふのである。

カントは、いつも書齋の窓から隣家の林檎の樹を眺めて、彼の哲學を考へて居た。或日隣家の主人がさうとは知らず、その林檎の樹を切つてしまつてから、見當がつかなくなつて彼が大さう考へにくゝなつたといふ話である。しかし、カントのやうに、同じ環境の裡に坐して、刻々變化する新思想が湧いてくるといふことは、我々凡人には、なか〳〵到達し難き境地である。そこで我々は旅に出る。

旅ほど、我々が考へさせられる折はない。それは、我々が考へるのではなくして、變化する四周の物象が、自分たちの胸臆から、未だ知らざる我々の姿を引きずり出してくれるのである。それは或時は音であり、或時は色であり、或時は人であり、或時は物である。

それが或時は、背後から出しぬけに飛び付いて來る。或時は眞正面に顏にぶつかる。そのたびに我々が、涙ぐんだり、笑つたりする。

一年も旅をして來ると、我々の思想上の荷物が嵩だかになつて居る。

（鶴見祐輔*法學士）

## 一三　新星

毎年夏になつてそろ〳〵夕方の風が戀ひしい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼臺が中庭に持ち出される。此が持ち出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しい區劃を付ける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼臺を出さうではないかといふ事が、誰かの口から言出される。しかし、その翌日が雨であつたり、雨でなくとも、種々な事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の





内にいよ〳〵今日はといふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から取り下され、一年中の塵埃や黴が濡れ雑巾で丁寧に拭ひ清められ、それから裏庭の日陰で乾かされる。そしていよ〳〵夕方になつてから中庭に持ち出されると、それで始めて私の家にほんとうに夏が來たといふ心持になるのである。

涼臺の外に折り疊みの椅子が三つ同時に並べられて、一同が中庭に集まる。まだ明るい宵の内に縄跳をする者もあれば、寫生帖を出して、お祖母さんの後姿をかいて居るものもある、明朝咲く牽牛花の莟を數へて報告するものもある。幼い女の兒二人は緣側へいろ〳〵なお花を並べて、花

屋さんごつこをする事もある。暗くなると花火をしたり、お伽噺をしたり、お祖母さんに「お國の話」をさせたりしてゐる。幼い子供には、未だ見た事のない父母の鄕國が、お伽噺の中の妖精國のやうに不思議な幻像に滿たされてゐるやうに思はれるらしい。鄕里の家の前の流には家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると上流の方から飼主が小舟で連れに來るといふやうな話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを幼い頭の中に描かせると見える。それで何時も「お國の話」をねだつて、おしまひには「あたしもお國に行きたいなあ」と一人がいふと、今一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢出る。私自身が





子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠い〳〵昔の出來事であつて、數年前迄生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして、祖父を見た事のない、或は朧げにしか覺えてゐない子供等には、會津戰爭や西南戰爭時代の昔話は、書物で見る古い歷史の斷片のやうにしか響かないだらう。そして、其だけに却つて祖父に對する懷かしみは淨化され純化されて、子供等の頭の中の神殿に收められるだらうと思つたりする。

今年の夏初に涼臺が持ち出されて間もなく、長男が宵の內南の空に輝く大きな赤味がかつた星を見付けて、あれは

何かと聞いた。見ると、それは黄道に近い處にあるし、チラチラ瞬きをしないから、いづれ遊星にはちがひないと思つた。そして近刊の天文雜誌を調べて見ると、それが火星だといふ事がすぐわかつた。星座圖を出して來て、あたつて見ると、それは處女宮の一等星スピカの少し東にあるといふ事がわかつた。それで其の圖の上に鉛筆で現在の位置を記し、其の脇に日附を書いて置いて、此の夏中此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふ事にした。

それが動機になつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃は未だ織女や牽牛は宵の中には可なりに東にあつた。西の





方の獅子宮には白く大きな木星が屋根越しに水のやうな光を投げてゐた。星圖にある變光星といふのは何かといふ疑問も出た。私は簡單な説明をしてやつて、丁度見えてゐた織女のすぐ隣のベータ、ライラの面白い光度の變化に注意させた。それから夜毎に氣を付けて見てゐたが、天文雜誌の豫報にあるやうな光が變るといふ事實が、子供の頭にどういふ風に感ぜられたか、それは私にはわからなかつた。

空を眺めてゐる中に、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が夜中空を見張つてゐる話をして、それから所謂新星の發見に關する話もして聞

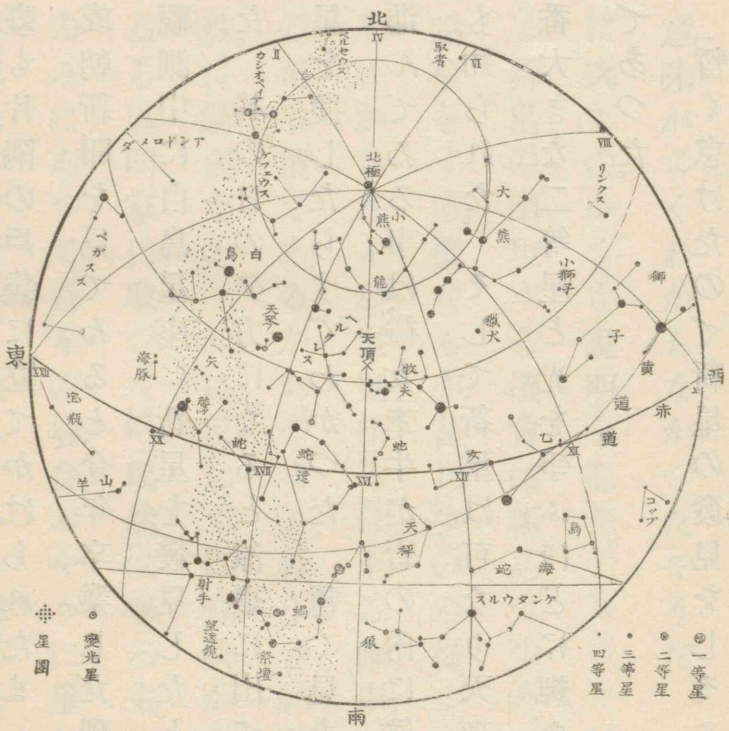
かせた。主だつた星座を諳記してゐれば、素人にでも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。

一秒間に十八萬餘哩を走る光が一年かゝつて達する距離を單位にして計られるやうな、莫大な距離を隔てて散布された天體の二つが、偶然接近して新星の發現となる機會は、例へば釋迦の引いた譬喩の盲龜が、百年に一度大海から首を出して孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほど少さうであるが、天體の數の莫大な爲に新星の出現はそれほど珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。





我が家の先祖の誰かが何處かでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠い〳〵宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと自分等の今の世に此の世界に屆くといふ事であつた。




星座圖

八月になつてから、雨天や曇天が暫く續いて、涼

臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。

或朝新聞を見てゐると、今年卒業した理學士K氏が流星の觀測中に白鳥星座に新星を發見したといふ紀事が出てゐた。其の日の夕方になると涼臺に出て、子供と共に其の新星を搜したら、すぐわかつた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐる事は、織女・牽牛が宵の内に眞上に來てゐるので也知られた。そして、新星は可なり天頂に近く白鳥座の一番大きな二等星と光を爭ふほどに輝きまたゝいて居るのであつた。

「暫く怠けたので新星の發見をしそこなつたね。」といつたら、子供はどう思つたか顏を眞赤にして、そして面白さうに





笑つてゐた。私は冗談のつもりでいつたが、子供には私の意味がよくわからなかつたやうだ。それで誤解のない爲に次ぎのやうな說明をした。

新星の出現する機會は極めて少い。吾々素人が星座の點檢をする機會も亦甚だ少い。從つて、先づ新星が現れて、それから吾々が發見するに至る確率（プロバビリチー）は、二つの小さな分數の相乘積であるから、つまり極小さいもののまた小さい分數に過ぎない。此に反して、每晩缺かさず空の見張をしてゐる專門家に取つては、「偶然」は寧ろ主に星の出現といふ事のみにあつて、吾々の場合のやうに、星と人とに關する二重の「偶然」ではない。强ひていへば、天氣の晴曇や、日常の支障

といふやうな偶然の出來事の爲に、一日早く見付けるかどうかといふ事が問題になるだけであらう。此の說明も子供にはよくわからないらしかつた。

其の內に又曇天が續いて、朝晩はもう秋の心ちがする。どうかすると、夜風は涼し過ぎる。涼臺もつい忘れられ勝になつた。從つて、星の事ももう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は、これから始まるので、學者達は每晩曇つた空を眺めては、晴間を待ち明して居る事であらう。（吉村冬彥*）

*實名は寺田寅彥
理學博士
物理學者
東京帝國大學教授



# 一四　雲中巨人

平地から山上に移ると、吾人の氣分は一轉して、別世界に入つたやうな感じがする。これは、一つには吾人の生存感覺に變化を生ずるが爲である。山上に於ては、氣壓・溫度の低下及び空氣の純潔化の爲に、肺臟・心臟及び皮膚の作用が急に彈力性を增し、それ等の變化に基づいて有機感覺が著しく變化し、概して感じが輕快になり、羽化登仙などと形容された氣分を生じ、體的生存の狀が平地にある時と大いに相違する。然して、又一方には、山上に於ては吾人の聽覺及び視覺に訴ふる所が平地上に於けるとは、大いに異なるが爲、更に山をして靈ならしめる。

吾人は雜然たる噪音を耳にする限り、俗界にあるといふ

感を離るゝことは出來ない。然るに、高山に登ると、平地上に於て聞き慣れたやうな物音は一切聽えなくなる。音響の滅却は吾人をして超人間たらしめる。鳥獸の聲、風雨の響の如きも、山上に於て聽く時は、雜音の充てる地上に於て之を聽くとは全く異なつてゐる。深山の夜には、所謂天狗の奏樂や、湖水の忍び泣きなどといふ異樣の音を聞くものである。しかし、鳥獸・風雨に限らず、苟も物音を聞く間は、吾人はなほ俗界を離るゝ事は出來ない。何等の物音なくして山上の風光を觀るに於て、山は愈〻靈なるものとなる。

視覺に映ずる山の景色が一種の別世界をなすのは、一は視線の角度が平地に於て景色を眺むる時と著しく相違す



るに基づく。平地の風景は主に眼と同水平に上下して開展してゐる。即ち吾人は主に風景の水平相を眺めてゐるが、山上に於ては、吾人の眼に映ずる風景は主に仰望相となり、或は俯瞰相となり、景物の配置や、形狀が平地に於て見る所と異なり、全體の景色が異相を呈し、何となく不思議に感ぜらるゝ。近來畫家中に風景の俯瞰相を描き、或は仰望相を描くものが漸次に多くなり、又西洋の立體派畫家は、景物の三相を同時に描き、時には逆天相をも加へて描かうとしてゐる。是等の畫面が新奇に見ゆるのは、山上の風光が別世界觀を呈すると同じ理によるのである。飛行機上より觀た風光の珍奇であるといふのも、極端な俯瞰相を見るか

らである。風景の俯瞰相或は仰望相をして一層奇ならしむるのは雲霧の働である。山上に於ける雲の發生、雲の形及び雲の色の變化に就いては、種々の奇現象があるが、私のこゝに擧げたいのは、雲中如來の現象である。雲中如來といふのは、山上生活をなす人の往々見る現象であらうと思ふが、私は嘗てこれを目擊した事がある。

私が大學生であつた頃、嘗て碓氷嶺の絕頂に一夏を過したことがあつた。其の頃は、輕井澤邊も今日の如く避暑客の群がることもなく、山上の閑靜を十分に味はふことが出來た。山上では曉の景色が殊に趣が深い。私は薄暗いうちに起き出でて山中を徘徊し、無人の境に天地の段々明るくなつて來るのを眺め、開闢の太初に人間が始めて天地を眺めた時は、こんな心持ではなかつたかと考へて樂しんでゐた。





或朝、例の如く散歩して、草花に被はれた小山の頂に登り、旭日に四方の照らさるゝを見てをつた所が、山下の高原に遽に雲霧が湧き出して、見る〳〵前方は一面の雲壁となり、背後には日は出てをりながら、私の身邊までも狹霧が被うて、半透明のヴエールを隔てて、あたりの風光を見るの心持がした。

ふと、前方を眺めると、雲霧の裏に巨人が立つてゐるではないか。私は心の迷かと思つて刮目して見たが、巨人は雲

霧中の實在なるを疑ふことが出來ない。殊に奇なるは、其の巨人の背後、肩の上の所に環光があつて、しかも其の環光は虹の環であつて、鮮かな色に輝いてをり、何とも名狀し難いほど美しいものであつた。美しい草花は露を帶びて、私の脚下に咲いてゐる。周邊には人一人ゐない。世間の響は勿論聽えて來ない。清涼の氣を呼吸して、眼前程遠からぬ所に靈光に輝く現身佛の姿を仰ぐ。此の光景は人寰に於ては容易に遭遇するを得ざるものであつた。

私は恍惚として、此の雲中の現象を眺め、嘆美の情は溢れて時の流をさへ忘れてゐたが、脚下より湧き出づる雲霧の益濃くなつて、暫くするうちに、私の一身以外の一切は滅却





してしまつた。

碓氷嶺では、時々善光寺如來の現身佛が出るといひ傳へられてゐるのは、恐らくこの雲中現象のことであらうが、此の現象はめつたに見た人は無いとのことである。空中蜃氣樓は數見る人があるが、雲中如來は蜃氣樓とは性質の異なるものである。これに類してゐるのは、獨逸のブロッケン山の空中怪物の現象であるが、ブロッケンの怪物は姿が殺伐であるのみならず、虹彩環の如き美しいものを負うてゐない。

空中如來の出現を、學問的に說明するのは容易の事であるが、其の光景が餘りに美しかつたので、これを說明するよ

りは、これを見たまゝに想ひ起すことを、私は樂しみとしてゐる。これを見たのは久しい前のことであるが、其の印象は今にあり〳〵と私の記憶に存し、背光の色彩の如き鮮明に心に殘つてゐる。

山越彌陀來迎圖

惠心の描いたものに山越彌陀と稱する圖がある。あれは叡山の上で見た光景を藝術化したものであらうが、私の見た雲中如來は姿其のものといひ、背景といひ、山越彌陀の圖よりも、もう少し神祕幽邃の情趣のあるものである。山をして靈ならしむるものは、前に述べた如く種々あるが、雲中如來の如き現象は畫龍の眼睛を點ずるが如く、山嶺を眼前に活躍させるものである。

（松本亦太郎）*

*文學博士
心理學者
東京帝國大學教授

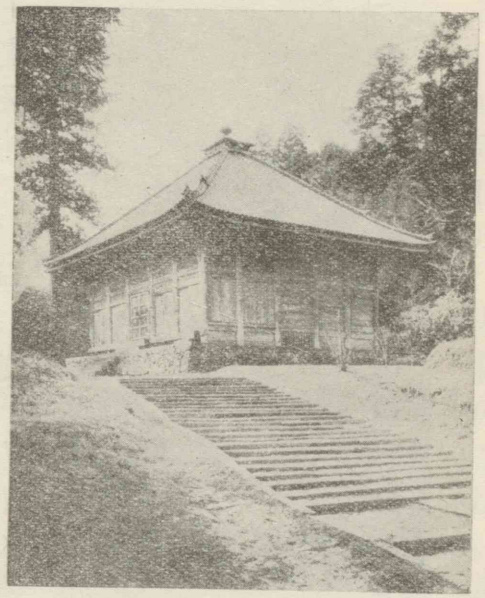
## 一五　光堂

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何もない、それが莊嚴であつた。日の光が山に漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、そこで巡

覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂次に寶物庫、さて金色堂いはゆる光堂、續いて經藏・辨財天といふ順序である。



金色堂

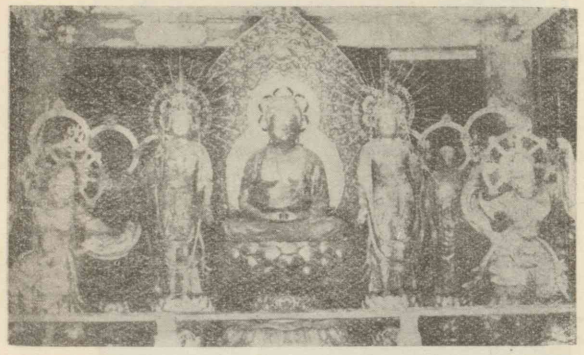
皆參詣の人を待つと、始めて扉を開く。すぐ又あとを鎖すのである。寶物庫には番人が居て、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなしに、一人經机に向つてゐた。

初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつつ、且芝生に散つて、敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いて居た。麓から上らうとする坂の下の取附の處にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、たしか「淺葱櫻」といふ札が建つて居た。けれども、それのみには限らない。處々汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに隨つて、ぱつとさえを見せて咲いたのはなかつた。薄墨・薑金また淺葱といつたやうな、どの櫻も皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帶びてゐた。雲がかかつた爲かも知れない。

と、階の前の花片が、折からの冷たい風にばら〳〵と誘はれ、さつと散つて、この光堂の中を空ざまにひらりと皆々舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に玉を刻んで綠青にさびたのが、なほ嚴かに美しい。その翼をばら〳〵とたたいて、ちら〳〵と床にこぼれかゝる。やがて宙で黃金の卷柱の光をうけて、ぱつと金色に飜るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を見はつた。

床も、承塵も、柱はもとより、たゝずむ處、踏む處は、黑漆の落ちた黃金である。黃金の剝げた黑漆とは思はれないで、しかも些のけばけばしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。われ等仙骨を持たない身も、この雲は足に踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をそのまゝ柱にしてゐがいた十二光佛の微妙な種種相は一つ〳〵錦の糸に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中に現はれて、清く明らかに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、寶相華・勝曼華が隙間もなく咲きめぐつて居る。



金色堂内部

この柱が須彌壇の四隅にある、まことに天上の柱である。

須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀・觀音・勢至の三尊・二天・六地藏が安置され、壇の中には眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、中には各一口の劍を抱き、鎭守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつて居るさうである。

經藏

雛芥子の紅は美人の屍より開いたと聞く。光堂はこゝに三個の英雄が結んだ金色の果(このみ)なのである。



謹んで拜して、天界一樣の雲を下りた。

階を下りさまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巢がかかつて、風に輕く吹かれながらきら〳〵と輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懷かしい。

羽目には天女・迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、かなでつつ浮き出て居る。影をうけた束・貫の材は、鈴と草の花の玉の螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利朱の獅子に騎してゐはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口を開けた、青い毛の部厚な横顏が見られるが、つづつと足を擧げ

さうな構へである。右にこの轡を取つて、ちよつと振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優闐王左に一匣を捧げたのは善哉童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利が、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩にかつぐやうに杖ついて立つ。髯も、額も、目も、眉もそのいづれも莞爾として、文珠も微笑んでまします。

經藏內部

第一獅子が笑ふのである、獅子が。

この須彌壇を左に、一架を高く設けて、ここに紺紙・金泥の





一卷を半ば開いて上げてある。見返しは金泥銀泥で、本經の圖解をゑがく。清麗巧緻で、且神祕である。

今ここに來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げるが如く、これは日光を仰ぐやうであつた。

架の裏に色の青白い痩せた墨染の若い出家が一人居た。私の一禮に答へて、

「お緩り御覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく、堂の內壁にめぐらした八つの棚に滿ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書きの一切經、並びに判官贔屓の第一人者三代秀衡老雄の奉納した黃紙宋板の一切經が、みな黑燿

の珠玉の如く漆の架に滿ちて居る。一切經の全部量は、七騎片馬と稱へるのである。

「拜見をいたしました」。

「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で卷袖で、寒くほつそりと草を行く。清らかな僧であつた。

（泉鏡花*）

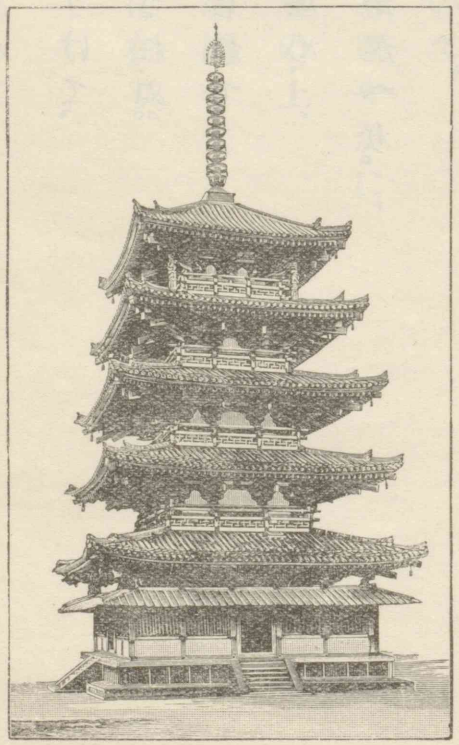
*名は鏡太郎　小說家

## 一六　塔影

墨繩ただす番匠（たくみ）が掌（たなそこ）の上に造られて、

朝狹霧の晴れ行けば、
寶珠を天に捧持ち、
岸に聳ゆる五層塔。

藏めし經も蠹みて、
供養忘れし末の世の
雲を遮る勾欄に、
清き鉋の痕見れば、



塵に氣韻（にほひ）も殘るかな。

秋は露盤に露うけて、
扉は神祕に閉されぬ。
四天の神に守られて、
金輪際に根を埋め、
夜は北斗をうかがへり。

家に住まざる山鳩の
巣くふに處得たればか、
虚空杳に翔れども、





畫棟の朱の古びたる
浮圖を慕うて歸るらむ。

落暉は西に傾いて、
五重の屋根のあざやかに、
重なりうつる草の上、
月は廂に浮かび出でて
九輪の影は水に在り。

雲の崖より吹落ちて
風湖を拭ひ去る。

波の面に刻まれし
藝術の花に咲き散らふ
時の力の遠きかな。

その世に媚びし歌反古は、
曆の嵐に破れたり。
生命の岸を下に見て、
天に呼吸する塔の
高き姿を水に見よ。

（河井醉茗）

## 一七　三十二年前（一）

今から三十二年前、自分が十八歳の時である。帝國議會が開かれて、やがて政府對政府反對黨の大衝突が起つて、衆議院は遂に解散されてしまつた。臨時總選擧が明治二十五年に行はれた。時の內務大臣は品川彌次郎子であつた。子は舊時代の豪傑であつた。政府反對黨の根據地を衝いて、その鋭鋒を摧く考であつたか、自由黨改進黨などの根據地として知られた高知・佐賀・福岡などの各縣に、露骨な力の選擧干涉が行はれた。新聞は、諸所に起つた時代錯誤の血腥い報道を傳へた。民黨・吏黨といふ言葉が彌が上に政府反抗の氣分を煽つて、國民は正當防禦の覺悟で、有志家・壯士・消防組の力で、政府の干涉の手を拂ひのけようとした。斯うして起つた明治政史を汚すべき不祥事が、今尙當時を見た人々の腦裏に深く印象してゐる。

我が縣の知事は當時官僚の利け者安場保和であつた。品川子の下に安場では、我が縣の選擧干渉には、此の上もない役者を得てゐたわけであつた。果然恐るべき暴力は、福岡の玄洋社や熊本の國權黨の壯士を以て、我*が鄉の頭上に加へられた。選擧期日が近づき、選擧運動が盛んになるに隨つて、町村を横行する政府與黨の運動、及び其の筋の干渉は猛烈となつて來た、憤慨の氣は街に滿ち充ちた。これが防禦の爲に、文字ある地方有志は悉く起つた。老人達は「御維新以來、とても再び干戈の動くのを見る機會はあるまいと思つてゐたのに、意外の事もあればあるもの。」と私語してゐた。實にその通りで、昔の武士の家々からは、祖先傳來の武器が、窃に選擧事務所に搬び込まれた。

當時事情あつて學籍を離れてゐた自分等數十の青年は、鄉黨有

*著者の鄉里は福岡縣柳河である





志の依頼を受けて、事務所の防禦、運動員の護衛を喜んで引受けた。自分は恩人Y氏を保護して、常にその身邊に附隨して、日々事務所に出入してゐた。そして、晝間は大抵事務所の階下に詰めてゐた。當時事務所に詰めて防禦の任に當つてゐたものは、黨員・運動員の外に劍術・柔術に秀でた町村の若者であつたから、自分達はその仲間に入つたわけであつた。火鉢を圍んでこれ等の人々の雜談を聞いてゐるのも、面白かつたが、時々起る活劇を目擊し、又所々に起つた事件の報知を聞くのが何より面白かつた。石川縣の坊主だと噂されてゐた吏黨の壯士が、三人挽の腕車を驅つて時々示威運動に來て、我等の事務所の玄關を脅したのも面白かつた。或一團が某村に運動に出掛けた所が、演說會場を敵派の壯士幾百名に襲はれたので、吶喊して圍を衝き、漸く一方の血路を開いて脫出して

來たといふ、身振り交りの報告も面白かつた。　某村に出掛けた一行は、敵壯士の群に襲はれて散り〳〵になつた、その中の一人が、一農家に逃込んで押入れの中に隱れてゐると、敵の壯士が此の家まで搜しに來た。　家人が異狀のない旨を答へたので漸く難は逃れたが、やがて意外にも隱れてゐる押入れの壁越しに、屋外からザクリザクリと白刃を突込まれた時ばかりは、生きた心地はしなかつたといふ、斯ういふ報告も面白く恐ろしく聞いた。

一日、隣郡大牟田町(今は市となつてゐる)に悲壯な事件が起つた。夜間此の郡の民黨選擧本部の附近で、同郡自由黨の領袖永江純一が反對黨の壯士に襲はれて、踵の關節部を斬られたのであつた。壯士等は重傷に惱む彼を引きずつて、自派の選擧事務所の土間に連れ込んで、一夜を其處に捨て置いた。　多量の出血で、重態に陷つてゐたのを、交渉の末漸く取返して彼の邸に運び、親族・知己の人々で治療・介抱に手を盡くして、其の後漸く一命を取留めたが、生れもつかぬ跛足になつてしまつた。

此の事變の起つた翌日の事であつた。　自分が事務所の階下の室にゐると、二階の幹部室から呼びに來た。　行つて見ると、其處にN氏がゐられた。　そして自分に大牟田の事務所まで使に行つてくれといはれた。　その使は、選擧費の運搬と狀勢問合せの二件であつた。　こんな用事に自分のやうな年弱ものを遣らずとも他に人があらうにと異しんで訊いてみると、大人は澤山ゐるが、却つて君の方がよからうといふ相談であるから是非行つてくれといふ事であつた。　自分は早速引受けた。　國難に際して、一國の安危を擔つて使に立つた古の英雄・豪傑のことなど思出して、自分ながら

總身の慄ひを覺えるやうな悲壯の感に打たれた。

先輩達がいろ〳〵腕車の世話をしてくれたが、最早時は薄暮に迫つてをり、大牟田までは五里もあるので、一人として應ずる車夫はなかつた。これまで數次此の途上で物騷な事件が起つてゐたのだから、車夫の嫌つたのも無理はなかつた。それで矢部川驛に出て、そこから汽車に乘つて行くことに決めた。驛までは一里半に過ぎぬ。自分は金を肌に附け、鐵棒を懷から身に添へて隱し持ち、暗號電報の符號を忘れぬやうに諳誦しながら、車に乘つて出掛けた。第一の難關と考へてゐた反對黨選擧事務所の前も、誰何を受くることもなく、無事に通過して停車場に著いた。

## 一八　三十二年前（二）

汽車に乘つて大牟田に著いた時は夜であつた。月の明るい夜であつた。豫て教へられてゐた選擧事務所なる某旅館を指して歩を運んだ。宵の事であつたから、街上には人通りが多かつた。此處だと思ふ旅館の前に行つて見ると、事務所らしい樣子が少しもない。變だと思つたので、横に見入れながら、その前を通過した。やはり事務所とは見えぬ。自分は迷うた。此の旅店より他にはそれらしい家はないのに、これは何としたことであらう。人に聞いて見ようかと思ひながら引返して來たが、若し聞いて異しまれたらどうしよう。うつかり聞くのは危險だと思ひついて、また空しく通り過ぎて橋の邊まで來た。此の橋が昨夜永江氏がやられたと聞いてゐる橋だと思うた時、それ〳〵永江氏の邸に行つて聞いたら間違はない筈と思ひついた。その邸はこれまで二度ばか

りも行つてよく知つてゐた。

橋から二町ばかり川に添うて下ると、そこに黑板塀・黑門の一構があつた。それが永江氏の別邸であつた。黑門は固く閉められてあつた。押して見たけれど、開かうとはせぬ。くぐりは無い。外に小門でもあるかと、門側を離れて左右の板塀を月明りに見まはつたがやはりない。困つて再び門側に立寄つた。玄關までは可成りの距離である。「御免下さい」と數度呼びながら門を叩いた。叩いた所で、格子になつた大きな黑門の高く鳴るわけはなかつたが、呼聲は聞えたらしく、「誰だ」とつつ慳貪な聲がした。自分はこれに何と答へたか記憶を逸してゐるが、いづれ名のつたことであらう。やがて勝手の方に戸の明く音がして提灯の光が見えて、門の處まで來た。巡査であつた。提灯を挑げて自分の顏を見て、やがてその儘引込んでいつた。自分は猶門側を去らなかつた。すると意外にも、玄關の戸の內から自分の名を高く呼ぶ聲がした。恩師T氏の懷しい聲であつた。自分は嘗て小學校で氏に愛せられた生徒の一人であつた。T氏は內から何しに來たかと聞かれる。自分は安心して

「N氏の使でこの町の選擧事務所に來たが、場所がわからぬので困つてゐます。」

といふと、T氏は

「さうか、昨夜永江君がやられたので、僕も看病に來てゐる。これまでの事務所は危險だといふので、今日急に移轉したから、わからぬ筈だ。橋の所から眞直に南に大通りをずつと行くと、大きな造り酒家がある。そこだ、Kといふ家だ。折角來てくれたけれど警

戒の爲門は開けぬから。といはれた。

門外から暇を告げて、一人教へられた路を辿つた。自分は警戒して、教へられた通りに、一人影を踏んで行つた。路は廣いが人通りの少い、淋しい路であつた。可なり來たと思ふと、其處に大きな邸があつた。田舍町の豪家によくある大きな構へで、古風な土塀のやうなものを周らし、入口は大戸が閉つてゐた。これか知らぬと考へながら、人聲でもしてゐるかと入口近く歩いて通つた。さして人聲も聞えぬ、事務所ならば護衞の壯士も居らうし、多少騷がしからうと、鄕里の事務所のさまから考へて、また引きかへして見たがやはり靜かである。人に聞かうには危險であるし、まゝよと覺悟して大戸に近づいた。

ガラリとくぐり戸を開けて上半身をさし入れた刹那、自分の手は誰かにしつかと握られた。はつと思ふと、目の前の土間の壁には武器が澤山立て掛けてあり、自分の手を握つた人は手に拔刀を持つてをり、一方に立つた人は槍を執つてゐた。自分の身體は此の二人の間に引込まれて、潛り戸ははたと閉められてしまつた。此の間に電光のやうに自分の頭に閃いた考は「失敗つた、誤つて敵の事務所に飛込んだのだ。」といふのであつた。此の際斯ういふ考の浮かんだには抑〻理由があつた。鄕里で日夕見てゐた所では、武器は幹部のゐた二階の押入深く隱してあつた。そして自分等も先輩達から、敵黨は政府及びその餘黨である、干涉は政府のなす所である、隨つて政府の命のまゝに動く警察は敵と見做さねばならぬ、敵黨の犯罪は警察によつて庇護されるが、反對に我が黨の犯す罪は峻嚴に檢擧される、故に武器を執つての爭には勝つても負け

になるから、寧ろ出來る限りこれを避けて、同志から罪人を出さぬやうにせよ』と戒められてゐたので、今眼前に見たやうに物騷な光景は少しも豫想して來てゐなかつた。それに、政府與黨の亂暴狠藉はこれまでにも數々見もし聞いてもゐたのであつたから、この殺氣立つた土間の光景から直に誤つて敵の事務所に飛込んだと思つたのも無理であるとは今以て考へない。

斯う思ひついた時、萬事休すと自分は心の中に決めてしまつた。逃れ出づべき方便はない。やがて身體も檢査されるであらう。檢べられれば金も發見されるであらう。使命は全く失敗に歸する。もう何としても逃るべき道はない。斯ういふ考が頭の中を駈廻つた時「貴樣は誰だ。」「何處の者だ」といふ質問が矢繼早にかけられた。怖ろしいといふよりは、困つたといふよりは、自暴自棄に





近い心持で、自分は

「柳河のものです。」

「Kさんといふ家を尋ねてをります。」

「此家はKさんの家ではありませんか。」

と素直に答へたが、質問が、

「何の用か。」

になつた時は、

「私用です遊びに來たのです。」

と虚言を吐いてしまつた。後で考へれば始に

「此家はKさんの家ではありませんか。」

と聞いて置いて、後で、

「遊びに來たのです。」

ではどうも辻褄が合はぬやうであるが、そこを合はせる餘裕はなかつたと見える。何度繰返して糾問されても、自分は

「遊びに來たのです。用は何もありません。」

と繰返すのみで、頑として實を吐かなかつた。威されても、賺されても、びくともしないのであつた。さうする内に、次第に奥からいろいろな人が集つて來た。其の中に兄の友人でFといふ人があつた。自分を見知つてゐて、聲を掛けてくれた。自分は名を呼ばれて、ふと顔を上げて見た。確に彼だと知つた。Fは、

「何しに來たのか。」

と問ふ。自分は此の時、此の人がゐるからには、反對黨の事務所と考へたのは誤斷であつたかと思つて、

「Iさんはおいでになるか。」

と問うて見た。Iさんといふのは此の前の町長で、郡の自由黨の領袖の一人であつた。答は無雜作な

「あゝをられるよ。」

であつた。自分は張りつめた弦を切つたやうに、固い決心から安心へと突きやられた。緊張した氣分から涙ぐましい暢び〳〵した氣分へと急に轉ぜしめられた。

「あゝさう、それでは此家はKさんの家か。」

「さうだよ。」

「それで安心した。僕は間違つて反對黨の事務所に飛込んだのかと思つてゐた。」

「ハヽヽヽ、そんなことはないよ。」

事故出來と奥の方からどや〳〵出て來て、物珍しげに見てゐた人

達も笑つた。

「實はNさんに使を賴まれて來たのです。Iさんにお目にかゝりたいのです。」

「さう、上り給へ、Iさんは奥にゐられる。」

Fさんは自分を導いて、幾つかの室を通り過ぎて奥の室に通した。

其處には數人の幹部らしい人達が火鉢を圍んでゐた。

自分はNさんの使の趣意を述べて、金を渡した、暗號の返電は早速使を立てて打つてもらつた、これで自分の使命は果したわけである。歸らうと思へばそれから歸られぬことはなかつたが、夜分は頗る物騷だから、泊つて明朝歸つたらよからうと留められて、此家に一夜を明すことに決心した。



## 一九　三十二年前　(三)

一先づ安心したので、今まで食事をしなかつた空腹の感が一時に起つた。もう食事は疾うに濟んだと見えて、何處にも食膳は見えぬ。遠慮をして默つてゐると、誰も食事のことは聞いてくれる人がない。皆夫々に多忙らしくしてゐる。戸口で自分の手を握つた男は、此の町の博徒の親分で、その男が乾兒を率ゐて、今夜表口を固めてゐるのだといふことも知つた。時々此の男が奥へ來て、如何にも親分らしい語調で、敵派の動靜を報じた。「敵の壯士の一團今本營を出て、東の方に向うた。」とか、「門前を異しいものが徘徊する、用心せよ。」とかいふ類であつた。自分は戰場にでもゐるやうな、悲壯な氣分で、ぢつと奥の室に坐つて、人々の話を聞いてゐた。誰

かが「そこらに蒲團があるから御寢みなさい。」といつてくれたので、食事は斷念して次の室に行つて見た。薄い蒲團一枚被けて三々五々ごろ寢してゐるものがある。餘つた蒲團も見つからぬので、自分は或人の蒲團の端にもぐり込んだ。

なか〳〵眠りは來さうもない。表口を固めた博徒の一團の話し聲と、奥の幹部の人達の笑ひ聲、それに時々奥にやつて來る親分の密偵らしい報告の聲などを聞いてゐると、眼は益〻冴えるばかりである。敵前の露營の感がひし〳〵と身に迫つて來る。忽ち「來たぞ。」といふ叫聲が奥の縁の方に聞えた。寢てゐた人達も蹶起した。手々に得物を携へて、聲の方角へ駈けて行つた。自分は武器一つ持たぬので、呆然と室の眞中に坐つてゐた。洋燈があか〳〵と點つてゐた。





雨戸を明けてばら〳〵と飛出して行く樣子であつたが、暫くしてから、またがや〳〵と戻つて來た。聞けば、土塀を越えて庭前をうろつく怪しい人影を見つけて騒いだのであつたさうな。怪しい人影は「來たぞ」といふ叫聲を聞いて、直もとの土塀を越えて逃げたさうな。自分は隨分物騒なことだと思つた。戰場にゐるやうな悲壯な感じを味はつた。例の親分が表からやつて來て、

「私の命のある限り、表口からは一歩も敵を入れませんから、奥の方は貴方がたで固めて下さい。」

といつて行つた。

自分は復もとの蒲團の中にもぐり込んで、人々の話聲を聞いてゐた。その中に、何時か眠つてしまつてゐた。

夜は白々と明けてゐた。自分は起きて庭園を見た。昨夜想像

してゐたよりは廣い立派な庭であつた。成るほど土塀がある、倉庫がある。昨夜の曲者はあの邊から越えて來たのだらうなどと想像して見てゐた。人々はなか〳〵起き出さうな樣子もないが、それでも幹部の連中はもう起きて奥に陣取つて、今日の運動方法、作戰計畫を講じてゐるのであらう。何か相談してゐる樣子であつた。

自分は食事を濟ませて、やがて暇を告げた。護衞の爲に壯士を附くるといふのを斷つて見たが、やはり危險だからといふので三人附けてくれた。自分の考では、壯士などは衝突を起す種だから、一人行く方が却つて安全だといふのであつた。それでもまた何となく氣丈夫でもあつたので、三人の壯士に衞られて停車場に向つた。



停車場の内は赤襷の壯士で一杯になつてゐた。自分はこゝでわざと護衞してくれた壯士と離れて、一人赤襷の群に入つて、その中を押分けて出札口に近づいた。何の顧慮もしない方が、疑を避ける途と思つたからである。よし疑はれた所で、往路とは違つて、何一つ證據品となるべき物を所持してゐなかつたから安心であつた。幸誰一人誰何するものもなく、無事に切符を求めて、無難にプラツトホームに出た。列車もわざと赤襷の多い列車に乘込んで、彼等の思ひ〳〵の氣焰を聞きながら矢部川の停車場に着いて、それから徒歩でわが町の本部に歸つた。安全に使命を果したわけである。

其の後幾度か此の事を回想した。多くの年月の間に繰返した

回想で、幾分か事實を美化し詩化してゐる所があるのかも知れない。今の自分に取つては、疑もなく有りの儘の事實であつても、それは眞實有りの儘の相でないのかも知れない。回想は詩であり、追憶は藝術であることを多く經驗する。自分に取つては、今此の事が詩であり藝術であるといつても、否定したくない。

今日の自分には、此の回想、追憶が、何となく尊いもののやうに思はれて、自分の此の文章が折角の此の尊いものをひどく汚したやうな氣持がする。やはり心の奥深く祕めて置くべきもののやうな氣持がする。事務所の潛り戸を明けて半身を入れて、はたと腕を握られた時、土間に引込まれてずらりと並んだ武器の前に、拔刀を手にした人、槍を持つた人を見て、轉倒した心持ちから捨身になつて漸く沈着を得た刹那の心持。それが自分には生涯に得易からぬ尊い經驗であるやうに思はれる。

社會に出てから、或人がその體驗として、嘗て非常な貧窮に陷つて、借金し得られる間は、月々の生活費をそれに由つて補塡する金策と申譯とに惱まされて、絶えず苦しかつた。その中に、貧窮は頂點に達し、親戚、友人の借り得べき限りは借り倒して、八方塞がりの境に立ち、手も足も出なくなつて、却つて月末になつても安易な心持になり得たと語つて聞かせた時、一番に自分の念頭に上つたのは、彼の事務所の土間で「失敗つた。萬事休す。」と考へた刹那の心持であつた。

佐久間大尉が潛航艇の沈没の難に遭つて、悠々たる態度で息を引取る瞬間まで、記錄を作つたといふ悲壯な記事を新聞で見た時も、自分に第一に想ひ浮かべられたのは彼の心持であつた。そし

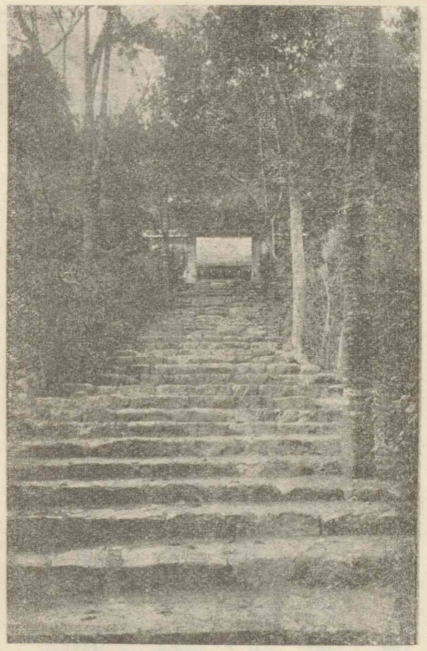
て、世間で大尉を英傑として稱揚した時、さうは容易に斷定は出來ぬ、少くとも新聞紙の傳ふる事實だけでは出來ぬ。英傑であつたかも知れないが、またなかつたかも知れない。平凡な人間でも「死」に直面した時は惡びれるものではない、萬策盡きた時は存外英雄的な態度を取り得るものだと考へた。又萬一自分が胃癌にでも罹つたら、早く醫師から明らかに胃癌だと敎へてもらひたい、その方がどれだけ幸福な餘命を送り得るか知れないと考へたこともある。小さい此の一つの體驗が斯うして自分には可なりに大きな力を以後の生活に與へてゐるともいへよう。三十二年といへば人生の半ばである。自分は此の長い間、此の些末な體驗を自分のものとして大事に保存してゐる。そして恐らく自分の一生涯に持ち得る尊いものの一つであらうと思うてゐる。（藤村作）

*文學博士
國文學者
東京帝國大學敎授

# 二〇　寂光院（一）

他動的な昔の日本の女性は、到底自分の纖弱な手によつて、進んで其の運命を開拓する事は出來なかつた。又開拓しようともしなかつた。大抵、其の父や、良人や愛子の成敗によつて、思はぬ立身を見たり、又思はぬ悲しみを見たりしたのである。それも前に苦い生活を送つて、後に甘美な生活を送るならば快いかも知れない。けれども前に花やかな豐かな暮らしをして、後に淋しい窮乏の生活をなす程堪へ難い事はあるまい。男子ならば、再び希望の光に接する

望もあらう。頼む人々に別れた女性は、其の前途に黑い影を見るのみである。日を追うて、一層悲慘に赴くのみである。以前の花やかな生活と對照すれば、寧ろ死を選んだ方がよいと思ふものすらあらう。建禮門院の如きは、氣高い純情の女性であるに關らず、得意の絶頂から、失意の最下層に陷られたのである。運命の女神が其の時めく花のやうな姿を覗いて、嫉妬したのかも知れない。

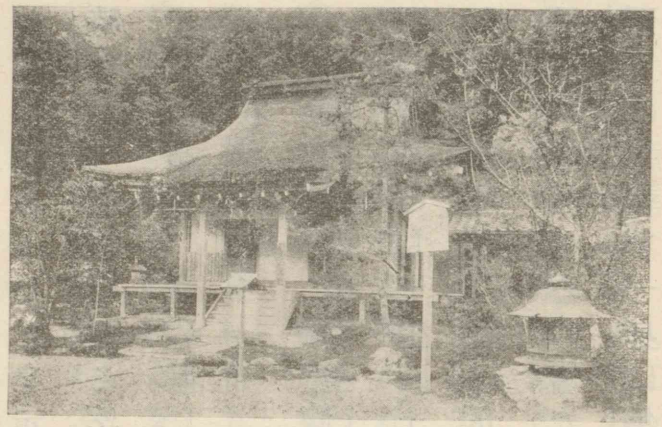


寂光院表門





私は、建禮門院の御生涯を思ふ毎に少女美と言ふことを思ふ。少女美は、總べての女性が、一生に一度之を我が有とする時代がある。其の清き無邪氣な優しい精神、浮世の惡夢に襲はれぬ朗かな面影こそ、少女美の精髓である。丁度、曉の銀の如き露にぬれて咲き出た紅蓮白蓮にたとへたい。若し婦人が永遠に其の少女美を保つことが出來たら、これ程幸福なことはあるまい。假令、年と共に、其の面影は多少



寂光院本堂

變るとも、朗かさ、清さ、優しさに於て變らねば、少女美の生命が尙保たるゝことを示すものである。建禮門院は、童幼の時代から最後に至る迄、此の少女美を保つて居させられたやうである。私の眼に氣高う美しく映るのはそれがためであるまいか。

建禮門院の前半生は平和と歡樂とに滿ちて居た。平相國の愛孃として生れ、十五歳の時、女御の宣旨を蒙り、十六歳の折、后妃の位に備はりて、帝王の傍に侍せられた。無限の君寵に浴して、心の儘ならぬことなく、やがて皇子を生みて、天下の果報を一身に集めさせられたやうに見えた。春は花見の宴に興ぜさせられたであらう。冬は五彩の衣を重





ねて寒さを忘れさせられたであらう。世の歡樂と平安とは、絶えず味ははせられる機會があつても、零落・漂泊の苦しさは夢にも御存じはなかつた。

所が、平家の沒落は、安德帝の御身の上に大なる變動を生じ、同時に國母と仰がれ給うた建禮門院の上にも惡しき影響を及ぼした。爾來、東漂西泊の辛酸を重ねて、浮世の波に揉まれ、零落の霜に苦しめられ給うた。しかも前の得意時代と後の失意時代とを通じて、純潔な少女美を保たれたのは、其の御精神が極めて氣高かつた爲であらう。

建禮門院が、暖い懷かしみある都を見捨てて、須磨・舞子の

邊に出でさせられた時、如何に深い旅愁を覺えられたであらう。若し是が漂泊の御身の上でなくば、青い穩かな海の色も美しく其の涼しい御眼に映つたであらう、松風の聲も平和の樂聲とお聞きなされたであらう。薄墨色の夜にさわぐ千鳥も無邪氣な友と思召されたであらう。けれども、行方定めぬ旅の空にあつては、總べて銷魂の種となつて、其の美しい御頰は、水晶のやうな涙の露にぬれたであらう。此の時、都の空を望んで、どんなに憧憬れ悶えさせられたか、翼あらば、其の儘飛んで行きたいとさへ思召しつめられたであらう。嗚呼、殘酷なる運命よ。

建禮門院は、やがて平家の一門に擁せられて、太宰府に着かせられた。心なき秋の月は、此にも澄み渡つたが、女院は之を悲愁の表徵のやうに眺めさせられた。間もなく緒方惟義の迫害に逢つて、平家の人々は惶しく、海に浮かんだ。九重の雲の上に平安の月を賞でられた御身が、動搖定めなき波の上に漂泊せられた折の御心持は、どんなに御淋しかつたであらう。殊に重盛の三男清經が急に斯の生を悲觀して、或夜、密かに海中に投身したことは、深く女院の悲痛を增したやうである。其の後、長門の目代が献じた百餘艘の船に乘つて、讃岐屋島に移り、形式ばかりの行宮を作つて、朝夕を送らせられた折も、流竄者に相應しい寂寞の空氣に包まれて、少しも御心の平安を得られなかつた。平家物語は

此の前後の哀史を詳しく記して居る。松籟濤聲は屢夜半の冷かな御夢を破つて、御身心を惱まし奉つたであらう。遠くに見ゆる白鷺の群は、源氏の旗印のやうに見え、野雁の鳴く聲は敵の攻めよせた吶喊の聲かと怪しまれたであらう。纖弱な美しい女房達は、日夜、物思ひにやつれ、暴き沙風に珠玉の如き皮膚を吹かれて、半ば昔の美しさを失つたものも多かつたであらう。建禮門院は、此の不安と憔悴と憂愁とに滿ちた周圍の光景に、唯熱き御涙を以て對せられたであらう。呪ふべき殘酷なる運命よ。

平氏が山陽・南海を風靡して、一の谷に城塞をかまへた時は、建禮門院も幾分か愁眉を開かせられた。けれども、其の





間、戰塵の絶間もないので、始終動搖した御氣分を抑へられるに由なかつた。一の谷の要塞陷落して、再び海に浮かび壇の浦に漂泊し給うた時は、艶麗な春色も悲しげに御覽になつたであらう。此の際、女院にとつては、最も慟哭に價する出來事が生じた。それは、安德帝が二位尼に抱かれて、波の底に沈ませられたことである。安德帝は、建禮門院が生ませられた幼少の君である。長き哀愁の霧に包まれた漂泊の御生涯に於て、せめてもの慰藉となつたのは、此の君の優なる御姿であつた。日に增し大人び給ふ繪のやうな御容を見て、僅かに此の世の悲しみを忘れられたのである。安德帝も亦、女院の暖き愛に深き懷かしみを覺えさせられ

た。然るに、平家の進退全く盡きて、名ある勇將・猛卒も、今は策を施すに由なく、壯烈な最期を遂げるに至つた。敵は誰彼の差別なく、押寄せて、凌辱を加へんとした。野蠻の坂東武者のむくつけさよ、彼等は、安德帝の尊嚴をすら、解しないのであつた。

雄々しき二位尼はかゝる悲境に沈淪しても、なほ其の高き誇りと、男らしい決心とを失はなかつた。尼は建禮門院に向うて「此の世の有樣、今はこれ迄と覺えます、此の戰に生殘る武士があつても、わらはの後生を弔ふことは覺束ないでございませう。昔から女は殺されることがないと承ります。君には後に殘つて、主上の御菩提を弔ひ、妾等が後世をも助け給へ」と申上げた。女院は、夢か現かと思召されたが、二位尼は、早くも安德帝を抱きまゐらせて、舷近く進み出た。私は、これ以上に記すに忍びない。私の眼には、かすかに山鳩色の御衣に、びんづらゆはせ給へる安德帝が、美しい御手を合せて、伊勢大神宮に御暇申し給へる御姿が見える。清秀の顏容に犯し難き氣象の溢れた二位尼が、海の上を指さして「あの波の底にこそ極樂淨土と申す都がございます、それへ御供いたしませう」と言ふ淋しい重い聲が聞える。此の時女院は、半ば氣を失はせられたであらう。安德帝の御最期を眼前に見奉り乍ら、これを助けまゐらすことが出來ぬとは、何たる因果かと焦慮り給ふ餘裕さへなかつたで

あらう。唯夢に夢見る御心持を抱かせられたであらう。

嗚呼恐ろしき運命の惡魔よ。

## 二一　寂光院（二）

女院は安德帝の海に沈み給ひし悲しさに、一時、失神の體に陷らせられたが、やがて元に復られると同時に、絶望の感じは、ヒシ〳〵と狹き御胸を壓した。「今は此の世の見納め」と覺悟して、御硯石を左右の懷に入れて逆卷く波の

建禮門院木像





中に身を投げさせられた。しかも女院の御運命はなほ盡きさせられなかつたと見えて、直に敵の熊手に引上げられ給うた。斯くて女院は、其の侍女等と共に、孤愁の思ひを抱いて、須磨、舞子の春の月に回顧の涙を注ぎつつ、懷かしい都に入らせられた。然し乍ら、其の都も、今は、苦しい追憶の現世地獄のやうに見えた。

建禮門院は莊麗な宮殿に入り給ふことも出來ないで、東山の麓、吉田の邊に詫びしい住居を定めさせられた。それは半ば朽廢した破屋で、庭には蔓草が思ひの儘にのび軒には苔が茂つてゐた。風雨は容赦なく吹き入つて、じめ〳〵した陰鬱な空氣が一杯漂つて居た。普通のものさへ住み

かねて、荒るゝに任せた家である。女院は思ひあまつて、此處を御住家とせられたものの、さすがに先立つものは御涙であつた。嘗て都を見捨てて、西海のさすらひの旅におでましになつた時は、一途に其の當時の御生活を淺ましいと思はれたが、それも今の朽屋に比べると、まだ〳〵安らかな快い自由なものであつた。安德帝に先立たれ給ひし以來、一歩は一歩より零落の淵に沈ませられるにつけて、今更に無常の哀感は、潮の如く湧き出づるを抑へ給ふに由なかつた。

平家の沒落以前迄は、建禮門院は此の世を樂觀して、不老不死の仙丹を得んと迄も思召されたであらう。悲劇の產





出に就いても、淡い夢の中の出來事のやうに思召されたであらう。然し漂泊の御身とならせられて、度々悽慘な死者を御覽になるにつけて、漸く此の世を悲觀し始めさせられた、歡樂の他面には、咀ふべき哀愁が漂うて居ることを知らせられた、銀燭の前に搖ぐ牡丹の如き全盛も、一度運命の惡魔の鐵鎚によつて破壞し始められると、片々と散つて、泥土に委せらるゝことを悟らせられた。それでも安德帝御在世の折は僅かに御心をまぎらすことが出來させられた。帝の崩御あらせられた後、再び都に入らせられるに及んで、厭世の感は正に高潮に達したのである。嗚呼過ぎ去りし華かな、はかなき夢よ。

文治元年五月一日、建禮門院は、厭世の極御髪をおろさせられた。御戒の師は長樂寺の聖僧であつた。女院は、御布施のしるしに充つべきものがないので、先帝の御移香の尙消えやらぬ御衣を賜はつた。これこそ長き御記念にもと思召して、はるばる西海の涯から御自身に携へられて、都に入らせられた後も、片時離させられなかつた貴重の品である。然し、それも御菩提のため思ひ切つて御手離になつた。悟道の域に入つた聖僧も、此の由來を承つては、黑衣の袖をぬらさざるを得なかつた。少し瘦せさせられた女院の哀艶な御顏も急に曇つた。



建禮門院は、既に佛の道に入つて、浮世の事を忘れようと力められたが、さすがに先帝の御俤のみはどうしても忘れさせられることが出來なかつた。逆捲く波の中に合掌して沈ませられた其の御俤、其の御聲、今尙髣髴と御眼の前にある。強ひてそれを拂ひのけようとし給ふ程、一層明瞭になる。初夏の短夜は次第に更けて行く。殘燈の光、屢瞬いて、破窓を打つ風雨の聲が、御身に沁むやうである。何處からともなく、花橘の香が、ほのかに空に通うて、山郭公の一聲が、闇の中に聞えた。

ほととぎす花たちばなの香をとめて
なくはむかしの人ぞこひしき。

これ女院が夢結ばれぬ夜半の哀愁を、硯の蓋に書いつけさせられたものである。

七月九日の大地震は、女院の御住居をも襲うたので、家は半ば倒れた。然し乍ら、誰も之を修理して上げるものはなかつた。夜も次第に長くなるにつれて、秋草の上にほろほろとまろぶ白露、かすかに咽びつつ絶え入らうとする虫の音、總べて女院の御物思ひの種となつた。夜毎に鋭い御神經のみ昂奮して、安らかな甘き御眠りを得させられなかつた。しかも無情な世の中は、薄倖な女院を慰めようともしないで、冷かに忘れてしまつた。唯、冷泉大納言と七條修理





太夫の北の方が思ひ出したやうに御慰問申すのみであつた。

それさへ極めて稀であつた。女院の厭世觀は、一層其の度を高めて、全く浮世の塵のかゝらぬ幽棲に逃れようと思召立たれた。斯うして大原山の奥にある寂光院に入らせられたのである。平家物語を見ると、「文治元年長月の末に、かの寂光院へ入らせおはします。道すがら四方の梢の色色なるを、御覽じ過させ給ふほどに、山陰なればにや、日もやうやう暮れかかりぬ。野寺の鐘の入相の聲すごく、分くる草葉の露しげみ、いとど御袖濡れまさり、嵐烈しく木の葉みだりがはし、空搔きくもり、いつしか打ちしぐれつつ、鹿の音

かすかに音づれて、虫の恨も絶え〳〵なり」と印象的に記してある。榮華の絶頂から零落の谷底に落ちさせられた女院は、かゝる景色を物凄いやうに思召されたであらう。海上の景色は、これに比べると、晴れやかなものであつた。山陰の景色は、淋しく物悲しい美しさを漂はせて、頻りに哀感を誘ひ出さうとするのであつた。

女院は、力なく寂光院に着かれたが、霜枯れた庭に朽葉堆く積つて、萎れはてた菊の花は、死の殘骸のやうに見えた。「今の我が身の淪落も亦此のやうであらう」と思召し合されて、佛前に跪き、先帝及び一門の冥福を祈らせられるにつけても、安德帝の御俤は尙ひしと附纏うて、御眼の前に浮かぴ





出る樣である。やがて、女院は寂光院の傍にさゝやかな庵室を結んで、一間を佛所とし、一間を御寢室と定めて、朝夕、佛に仕へさせられるに餘念もなかつた。かしづきまゐらせたのは、大納言の佐の局、阿波內侍の二人に過ぎなかつた。私は此の寂しき人々をなつかしく思ふ。

（高須芳次郎*）

*號は梅溪文士

## 二二　旅の旅の旅

われ浮世の旅の首途してよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居を見すてしよりこゝに十日、身は今旅の旅に在りながら風雲の念ひ猶已み難く、頻りに道祖神にさわがされて、霖雨の晴間を

うかがひ草鞋よ脚絆よと身をつくろひつつ、一個の袱包を浮世のかたみに擔うて、飄然と大磯の客舍を出でたる後は、天下は股の下、杖一本が命なり。

國府津・小田原は一所懸命にかけぬけて、はや箱根路へかかれば何となく行脚の心の中うれしく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧糢糊の間に白雲光あり。

白露の中にほつかり夜の山。

湯元に辿り着けば、一人のをのこ袖をひかへて、いざ給へ善き宿まゐらせんといふ。引かるゝまゝに行けばいとむさくろしき家なり。前日來の病もまだ全くは癒えぬに、此





の旅亭に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、やや落膽したるが、ままよこれこそ風流のまじめ、行脚の眞面目なれ。

だまされてわるい宿とる夜寒かな。

つぎの日まだきに起き出でつ。板屋根の上の滴るばかりに沾ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。よもすがら雨と聞きしも筧の音、谷川の響なりしものと、はや山深き心地ぞすなる。けふは一天晴れ渡りて、瀧の水朝日にきらつくに、鶺鴒の小岩づたひに飛びありくは、逃ぐるにやあらん、はたこなたへとしるべするにやあらんと、草鞋のはこび自ら輕らかに箱根街道をのぼり行けば、鵯の聲左右にかしまし。

我がなりを見かけて鵜の鳴くらしき。

色鳥の聲をそろへて渡るげな。

秋の雲瀧をはなれて山の上。

病みつかれたる身の一足のぼりては一息ほつとつき、一坂のぼりては巖端に尻をやすむ。駕籠舁の頻りに駕籠をすすむるを耳にもかけず、「山路の菊野菊ともまた違ひけり」。と吟じつゝ行けば、

どつさりと山駕籠おろす野菊かな。

石原に痩せて倒るゝ野菊かな。

などおのづから口に浮かみて、はや二子山鼻先に近し。谷に臨めるかたばかりの茶屋に腰掛くれば、秋に枯れたる婆





様の挨拶何となくものさびて面白く覺ゆ。見あぐれば、千仭の谷間より、木を負うて下り來る樵夫二人・三人、のそりのそりとものも得言はで汗を滴らすさま、いと哀れなり。

樵夫二人だまつて霧をあらはるゝ。

樵夫も馬子も皆足を茶屋に休むれば、それ〳〵にいたはる婆様のなさけ、一椀の澁茶よりも猶濃し。

犬蓼の花くふ馬や茶の煙。

店さきの柿の實つゝく烏かな。

名物ありやと問へば、力餅といふものなりとて大きなる餅の燒きたるを二つ三つ盆に盛り來る。

山姥の力餅賣る薄かな。

など、戯れつつ、力餅の力を假りて上ること一里餘、杉・樅の大木道を挾み、元箱根の一村目の下に見えて、秋さびたるけしき仙源に入りたるが如し。

紅葉する木立もなしに山深し。

千里の山嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏み碎きて上り着きたる山の頂に、鏡を磨き出せる蘆の湖を見そめし時の心ひろさよ。餘りの絶景に恍惚として立ちも得さらず、木のくひぜに坐してつくづくと見れば、山更にしん〳〵として、風吹かねども冷氣冬の如く、足もとよりのぼりて腦巔にしみ渡るこゝちなり。波の上に飛びかふ鶺鴒は忽ち來り忽ち去る。秋風に吹きなやまされて力なく、水にすれつあがりつ、





胡蝶のひらひらと舞ひ出でたる箱根のいたゞきとも知らずてやいと心づよし。遙かの空に白雲とのみ見つるが上に、兀然として現はれ出でたる富士、ここからも猶三千仞はあるべしと思ふに更に、其の影を幾許の深さに沈めて、さゝ波にちぢめよせられたるまたなくをかし。箱根驛にて午餉したゝむるに、皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに、こは湖水の產にして、ここの名物なりといふ。名を問へば赤腹となん答へける。面白き魚の名なりけり。これより山を下るに、見渡す限り皆薄なり。箱根の關はいづちなりけんと思ふものから、問ふに人なく探るに跡なし。これらや歌人の歌枕なるべきとて

關守のまねくやそれと來て見れば、
尾花が末に風わたるなり。

薄の句を得たり。

大方はすゝきなりけり秋の山。

伊豆相模境もわかず花すゝき。

二十餘年前迄は金紋・さき箱の行列整々として、鳥毛・片鎌など威勢よく振り立て振り立て行きかひし、街道の繁昌もあはれものの本にのみ殘りて、草刈るわらべの小道一筋を除きて外は、草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列のおもかげを薄の穗にとどめたり。

槍立てて通る人なし花芒。



三島の町に入れば、小川に菜を洗ふ女のさまもやゝなまめきて見ゆ。

面白や、どの橋からも秋の富士。

三島神社に詣でて、昔、千句の連歌ありしことなど思ひ出せば、有り難さ身に沁みて、神殿の前に跪き、しばし祈念をぞ凝らしける。

三島の旅舍に入りて、一夜の宿りを請へば、草鞋のお客樣とて、町に向きたるむさくろしき二階の隅にぞ押しこめられける。笑うてかなたの障子を開けば、大空に突つ立ちあがりし萬仞の富士、夕日に紅葉なす雲になぶられて、見る見る萬象と共に暮れかゝるけしき、到る處風雅の種なり。

*名は常規　俳人
明治三十五年歿

## 二三　貧居八詠

（正岡子規）

飯は飽くを以て限りとし、茶は出流れを以て好しとす。

ぽつちりと味噌皿寒し膳の上。

絹蒲團の榮耀も無く、紙衾の風流も知らず。

重ねても輕きが上の薄蒲團。

やう〳〵に求め得たる數十卷の書冊も、之を容るべき函を持たず。

古書幾卷水仙も無し床の上。

一蓋の笠、一枚の簑は、猶掛けて柱に在り。

物は何木枯しの笠雪の簑。

米を炊く下女もなく、水を汲む下男も居らず。

薪を割るいもうと一人冬籠り。

家は上野を負うて、庭には一株の樹だに植ゑず。

三尺の庭に上野の落葉かな。

古き摺鉢を下して、假の手水鉢とはなしぬ。

水鉢の氷をたゝく椿木かな。

雨は頻りに漏れども、屋根を繕ふ力なし。

しぐるゝや寫本の上に雨のしみ。

（正岡子規）

# 女子新讀本　卷七　終




大正十五年七月五日印刷
大正十五年七月十日發行
大正十五年十月八日訂正再版印刷
大正十五年十月十二日訂正再版發行

女子新讀本

定價
卷一、二、三、四各金四拾貳錢
卷五、六、七、八各金參拾八錢
卷九、十　各金參拾七錢

昭和三年度臨時
定價
卷一、二、三、四　金七拾錢
卷五、六、七、八　金六拾參錢
卷九、十　金六拾壹錢

著者　久松潛一

發行者　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　佐藤正叟

印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

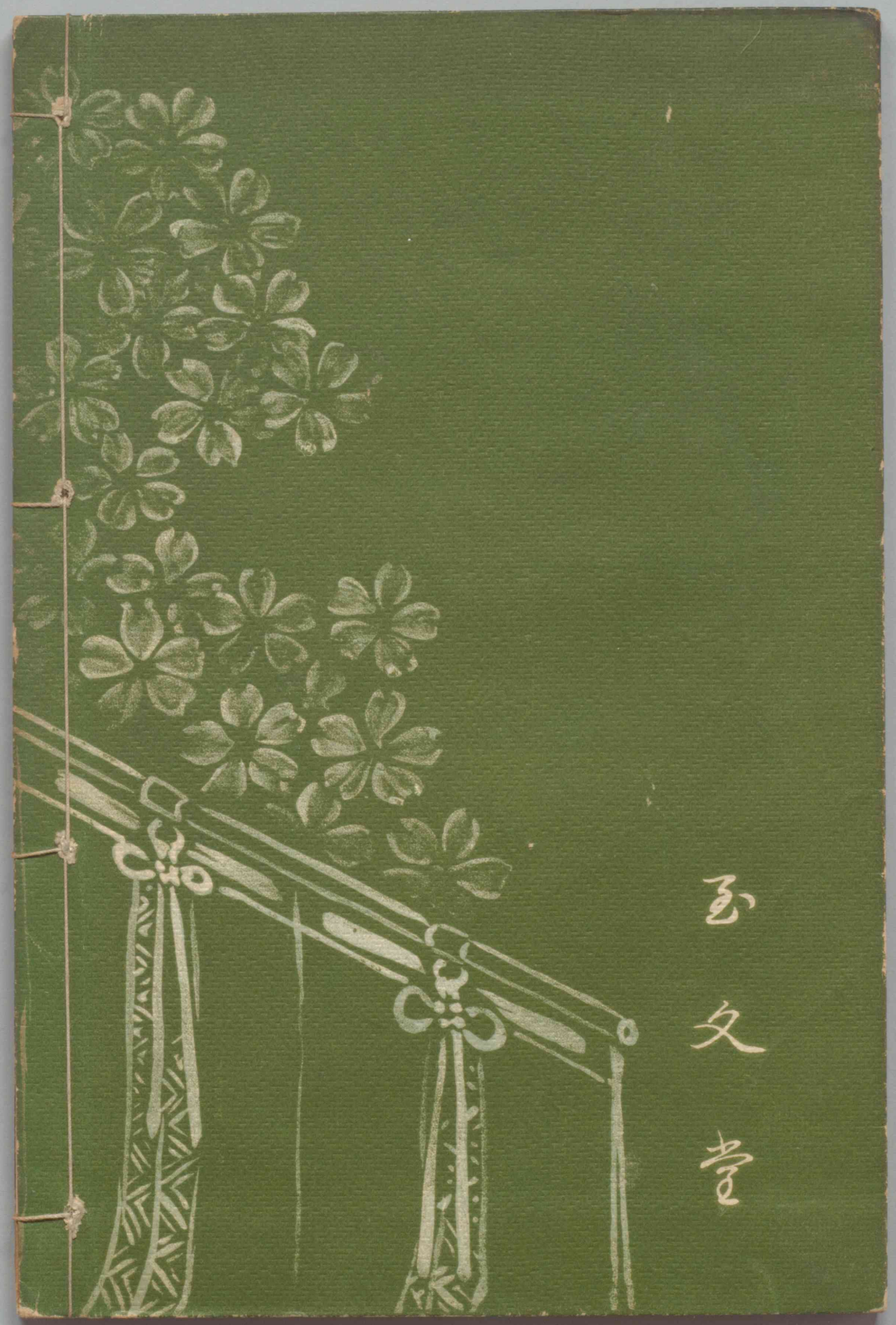
（三協印刷株式會社印刷）

發行所　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　至文堂
振替口座東京二九五〇七番　電話青山（代表）三五四六番　四三四三番



不許複製

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます


玉文堂